大倉幕府跡（No.253）

－雪ノ下三丁目 637 番 4 地点－

例言

1．本報は、大倉幕府跡（No.253）内の鎌倉市雪ノ下三丁目 637 番 4 における個人専用住宅の新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。調査面積は 68.00 ㎡。

2．発掘調査は、平成 18 年 11 月 21 日から平成 19 年 1 月 19 日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。

3．発掘調査体制は次の通りである。

調査担当者　熊谷満

調　査　員　伊藤博邦

作　業　員　奥山利平、渡辺輝彦、中須洋二、片山直文、堀住稔、鈴木啓之

4．現地調査での写真撮影は熊谷が行った。

4．本報作成にあたっての資料整理参加者、および分担は次の通りである。

整理参加者　熊谷満、降矢順子、押木弘己、伊藤博邦、岡田慶子、加藤千尋、三浦恵

遺物分類：降矢順子　遺物実測・トレース：伊藤博邦、岡田慶子、三浦恵

遺物写真撮影：押木弘己　遺構図面トレース、図版作成、原稿執筆：熊谷、編集：熊谷、降矢

5．本報の凡例は次の通りである。

・図版縮尺　遺構図：1/60、遺物図：1/3（古銭 1/2）

・遺構図版　水糸高は海抜標高値を示す。

・遺物図版　－・－および　は釉薬の範囲、←・→は使用痕の範囲を示す。

・遺物法量表　( ) は復元数値、[ ] は残存数値を示す。

6．本報記載の「土丹」はシルト質凝灰岩、「鎌倉石」は粗粒凝灰岩を示す。

7．現地調査から本報作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関に御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

齋木秀雄（有限会社鎌倉遺跡調査会）、松尾宣方、社団法人鎌倉市シルバー人材センター

8．本調査に関わる出土遺物、図面、写真などの資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目次

本文目次

第１章　遺跡の立地と環境 ---------- 209
第２章　調査の概要 ---------- 211
第３章　検出された遺構と遺物 ---------- 214
第４章　まとめ ---------- 243

挿図目次

図１　調査地点周辺 ---------- 209
図２　調査区配置図 ---------- 211
図３　堆積土層 ---------- 212
図４　第１面全体図 ---------- 215
図５　第１面出土遺物 ---------- 216
図６　第２面全体図 ---------- 217
図７　第２面遺構微細図 ---------- 218
図８　第２面遺構１－ｂ、２出土遺物 ---------- 219
図９　第２面遺構６、７、３出土遺物 ---------- 220
図10　第２面遺構５出土遺物 ---------- 221
図11　第２面遺構外出土遺物 ---------- 222
図12　第３面全体図 ---------- 223
図13　第３面遺構微細図 ---------- 224
図14　第３面遺構７－ｂ、92、26、56・66、57 出土遺物 ---------- 225
図15　第３面遺構 58、67、71、77、51、90、78、55、65、84 出土遺物 ---------- 226
図16　第３面遺構外出土遺物（１）---------- 227
図17　第３面遺構外出土遺物（２）---------- 228
図18　第４Ａ面全体図 ---------- 229
図19　第４Ａ面遺構 91 出土遺物（１）---------- 230
図20　第４Ａ面遺構 91 出土遺物（２）---------- 231
図21　第４Ａ面遺構 91 出土遺物（３）---------- 232
図22　第４Ａ面遺構 91 出土遺物（４）---------- 233
図23　第４Ａ面遺構 96 出土遺物（１）---------- 234
図24　第４Ａ面遺構 96 出土遺物（２）---------- 235
図25　第４Ａ面遺構 96（３）、第４Ｂ面遺構 106、128 出土遺物 ---------- 236
図26　第４Ｂ面全体図 ---------- 237
図27　第４Ｂ面遺構断面図 ---------- 238

表目次

表１　遺物法量表（１）---------- 239
表２　遺物法量表（２）---------- 240
表３　遺物構成表（３）---------- 241
表４　遺物法量表（４）---------- 242
表５　遺物構成表（５）---------- 245

写真図版目次

図版１　１．Ⅰ区第1面全景（南から）---------- 246
２．Ⅰ区第2面全景（東から）
３．Ⅰ区第2面遺構2･3･5（西から）
４．Ⅰ区第2面遺構2上層（西から）
５．Ⅰ区第2面遺構2下層（西から）
６．Ⅰ区2面遺構2かわらけ重なり状況（北東から）
７．Ⅰ区第2面遺構5･6（西から）
８．Ⅰ区第2面遺構7（西から）
図版２　１．Ⅰ区第2面遺構3 ---------- 247
２．Ⅰ区第2面遺構5上層（西から）
３．Ⅰ区第2面遺構5かわらけ重なり状況（東から）
４．Ⅰ区第2面遺構5中層（西から）
５．Ⅰ区第2面遺構5下層（西から）
６．Ⅰ区第2面遺構5下層かわらけ重なり状況（東から）
７．Ⅰ区第2面遺構5掘り方（西から）
８．Ⅰ区第3面全景（南から）

図版３　１．Ⅰ区第3面礎石列（北から）------ 248
２．Ⅰ区第3面遺構7-b（西から）
３．Ⅰ区第3面遺構7-b
かわらけ出土状況（北から）
４．Ⅰ区第3面遺構92（西から）
５．Ⅰ区第3面遺構56（西から）
６．Ⅰ区第3面遺構84（北から）
７．Ⅰ区第3面調査風景（南東から）
８．Ⅰ区第4A面全景（南から）

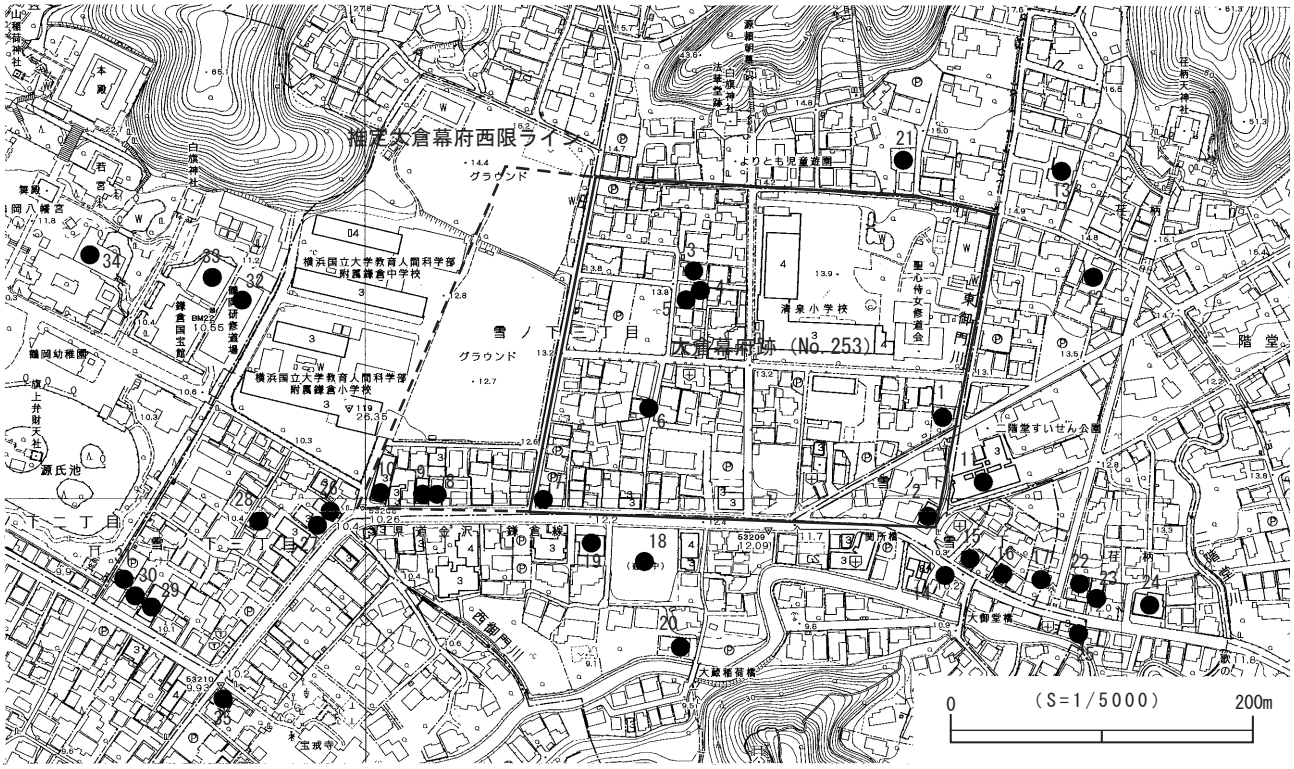
図版４　１．Ⅰ区調査区北壁堆積土層 ---------- 249
２．Ⅰ区第4A面遺構91
弓形出土状況（南西から）
３．Ⅱ区第4A面全景（南から）
４．Ⅱ区第4A面遺構96
かわらけ出土状況（北から）
５．Ⅱ区調査区北壁堆積土層
６．Ⅰ区第4B面全景（北から）
７．Ⅱ区第4B面全景（南から）
８．Ⅱ区第4B面遺構138（南西から）

図版５　出土遺物 ---------- 250
図版６　出土遺物 ---------- 251
図版７　出土遺物 ---------- 252
図版８　出土遺物 ---------- 253

第１章　遺跡の立地と環境

本調査地点は鎌倉市雪ノ下三丁目 637 番４に所在する、大倉幕府跡（No.253）の一地点である。大倉一帯は東西約 800 m、南北約 500 mの谷底平野もしくは山麓平野であり、近世以降は大倉耕地とも呼ばれる耕作地となっていた。鎌倉における低地の中でも比較的早い段階から乾陸化していたことが推測されており、周辺の遺跡からは弥生時代中期後半以降の集落跡が多数検出されている。

『吾妻鏡』によると、治承四年（1180）10 月６日に鎌倉に入った源頼朝は、父義朝の旧邸跡（現在の寿福寺の所）に自らの新邸を造営しようとしたものの土地が狭く、すでに岡崎義実によって義朝の菩提を弔う堂が建てられていたこともあって大倉郷のこの地に新邸を造営することになったとする。およそ二ヶ月後の 12 月 12 日には新邸が完成し「移徙之儀」が行われたが、当初の建物は山ノ内荘の知家事兼道邸宅を移築したものであったといい、養和元年（1181）６月に新御所が完成している記事が見られることから、頼朝の居住後も整備は順次進められていたものであろう。以来頼家、実朝に続く源氏三代の政務がここで執り行われた。御所は実朝死後、承久元年（1219）12 月 24 日の火災で全焼しているが、『海道記』には貞応二年（1223）に鎌倉を訪れた筆者が御所について書き記しているので、御



大倉幕府跡（No.253）
1．本調査地点
2．雪ノ下字大倉耕地569番１『大倉幕府周辺遺跡群雪ノ下字大倉耕地569番１地点発掘調査報告書』1990
3．雪ノ下三丁目701番３『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21（第１分冊）』2005
4．雪ノ下三丁目701番１『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21（第１分冊）』2005
5．雪ノ下三丁目701番14『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21（第１分冊）』2005
6．雪ノ下三丁目651番８外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15（第２分冊）』1999
7．雪ノ下三丁目618番４『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18（第１分冊）』2002

大倉幕府周辺遺跡群（No.49）
8．雪ノ下三丁目607番１『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20（第２分冊）』2004
9．雪ノ下三丁目607番ほか『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10（第１分冊）』1994
10．雪ノ下三丁目606番１『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書９（第３分冊）』1993
11．二階堂字荏柄38番１『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書９（第２分冊）』1993
12．二階堂字荏柄27番３の一部『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22（第１分冊）』2006
13．二階堂字荏柄58番４外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18（第１分冊）』2002
14．雪ノ下四丁目567番７『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20（第２分冊）』2004
15．雪ノ下字大倉耕地562番16『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17（第２分冊）』2001
16．雪ノ下字天神前562番29『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12（第１分冊）』1996
17．雪ノ下字大倉耕地565番４『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７』1991
18．雪ノ下四丁目581番５『大倉幕府周辺遺跡発掘調査報告書』2007
19．雪ノ下四丁目620番５『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14（第２分冊）』1998／『大倉幕府周辺遺跡群－雪ノ下四丁目620番５地点－』1999
20．雪ノ下四丁目580番10ほか『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17（第２分冊）』2001

大倉幕府北遺跡（No.193）
21．西御門二丁目756番６・10『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21（第１分冊）』2009

横小路周辺遺跡（No.259）
22．二階堂字荏柄10番１『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19』2003
23．二階堂字荏柄10番６ほか『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16（第２分冊）』2000
24．二階堂字荏柄９番１『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書６』1990
25．雪ノ下五丁目557番１『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14（第２分冊）』1998

政所跡（No.247）
26．雪ノ下三丁目965番１『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書８』1992
27．雪ノ下三丁目966番１『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書８』1992
28．雪ノ下三丁目970番２外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15（第２分冊）』1999
29．雪ノ下三丁目987番１・２『政所跡』1991
30．雪ノ下三丁目988番『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書９（第３分冊）』1993
31．雪ノ下三丁目989番４『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17（第１分冊）』2001

鶴岡八幡宮旧境内（No.56）
32．研修道場用地『研修道場用地発掘調査報告書』1983
33．国宝館収蔵庫用地『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書』1985
34．直会殿用地『直会殿用地発掘調査報告書』1983

北条高時邸跡（No.281）
35．小町三丁目426番３『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12（第１分冊）』1996

図１　調査地点周辺

所は再建されていたらしい。その後、御所は嘉禄元年（1225）北条泰時によって宇津宮辻子辺へと移転が行われ、嘉禎二年（1236）には若宮大路東頰へとさらに移転されている。

「大倉」の名は、『吾妻鏡』治承四年（1180）12 月 12 日条に見えるのが史料上の初見であり、大倉郷は律令制下の郷名ではなく幕府公領としての郷と推測されている。『攬勝考』では、大倉郷の群域を鶴岡八幡宮から東は朝夷奈切通まで、南は滑川、北は大蔵山の麓瑞泉寺までを境とする広域を指すとする。嘉禎元年（1235）および宝治元年（1247）には法華堂前で火事があり、いずれも人家数十宇が焼失している記事が見られる。また、建長三年（1251）12 月 3 日条に、商売を営んでよい所として、大町・小町・米町・亀谷辻・和賀江・気和飛坂山上とともに「大倉辻」の名も見え、幕府移転後は民衆も多く居住する商業地域として栄えたようである。その後この地は、南北朝期には円覚寺へ、戦国期には建長寺へ寄進され、16 世紀末徳川領になってからは雪ノ下村の小名として「大倉」の名を残している。近代には広く耕作地となっていたようであるが、金沢鎌倉街道沿いには建物が建ち並び、商売を生業とする住民が多く住んでいたという。

本調査地点周辺ではこれまで多くの発掘調査が行われており、その主な地点を図 1 に示した。ただし、大倉幕府域と推定される範囲に限れば、調査例はそれほど多くない。最も近い地点 2 では、7 世紀頃に埋没した流路のほか、中世後期から近世にかけての礎石建物や南北溝などを検出しており、礎石建物は関取場に関連するものである可能性が示唆されている。地点 3,4,5 では、13 世紀初頭から 15 世紀前半に至るまで 11 面にも及ぶ遺構面に、掘立柱建物跡をはじめとする多種多様な遺構群を検出している。地点 6 は掘削深度規定により基盤層まで調査が及ばなかったものの、14 世紀代の遺物を伴う良好な土丹地業面を検出しており、道路あるいは通路遺構とも推測されている。地点 7 では、14 世紀後半以降の六浦路と推定される道路および側溝のほか、それを遡る年代となる断面Ｖ字形の東西溝も検出されている。出土遺物が弥生土器片 2 点のみであるため詳細な年代は不明であるが、覆土の特徴は地点 19 検出の溝 9 に近似するもので、溝 9 は平安時代後～末期に属する可能性が指摘されている。地点 8,9,10 では 13 世紀初頭～ 15 世紀代にかけての遺構群が検出されており、地点 8 ～ 10 まで繋がる中世前期の東西溝のほか、地点 10 では塀あるいは柵と思われる南北柱穴列も検出されており、それぞれ幕府域の南限・西限を示すものとして期待される。また、幕府推定域外ではあるが、本調査地点に最も近い 11 地点では、鎌倉時代初期から江戸時代以降に至るまで濃密な遺構群が展開しており、二階堂大路の側溝と思われる溝やそれに沿う柱穴列、東御門川旧流路やそれに沿う道路状遺構のほか、それらに囲まれた平坦部分からは掘立柱建物跡 12 棟・井戸 14 基などが検出されている。

＜引用・参考文献＞

白井永二編『鎌倉事典』1992 年　東京堂出版
三浦勝男編『鎌倉の地名由来辞典』2005 年　東京堂出版
鎌倉市教育委員会編『鎌倉市文化財資料第 7 集　としよりのはなし』第五刷 1990 年（初版 1971 年）
　鎌倉市教育委員会

第２章　調査の概要

１．調査の経過と方法

本調査は雪ノ下三丁目637番4地点における、個人専用住宅の建築に伴う埋蔵文化財発掘調査である。現地調査期間は平成18年11月21日から平成19年1月19日までのおよそ２ヶ月で、調査面積は約68.00㎡。現地表の標高は約12.5ｍを測る。掘削に伴う残土を場内処理する都合から調査区を東西に区分し、便宜上西側をⅠ区、東側をⅡ区と呼称した。調査はⅠ区から実施することとし、まず重機により表土を除去することから始められ、その後はすべて人力による作業となった。調査の結果４枚の遺構面が検出され、各面において遺構を掘削後、測量・写真撮影などの記録保存を行った。Ⅰ区調査終了後に重機による埋め戻しを行い、その後同様の手順でⅡ区の調査を行った。

測量に際しては、鎌倉市四級基準点E151（X=－75326.503,Y=－24339.083）E152（X=－75336.977,Y=－24367.106）を基に、日本測地系（座標系AREA 9）の国土座標軸に準じたグリッドを設定した。このため本報で用いている方位標の北は真北を示す。世界測地系第Ⅸ系の国土座標値については、日本測地系X=－75310,Y=－24310がX=－74953.3762,Y=－24603.4226へ、日本測地系X=－75310,Y=－24330がX=－74953.3752,Y=－24623.4222へ算出された数値を図２に示した。また海抜標高値は、鎌倉市三級基準点No.53209（標高12.109ｍ）を基に移設した。

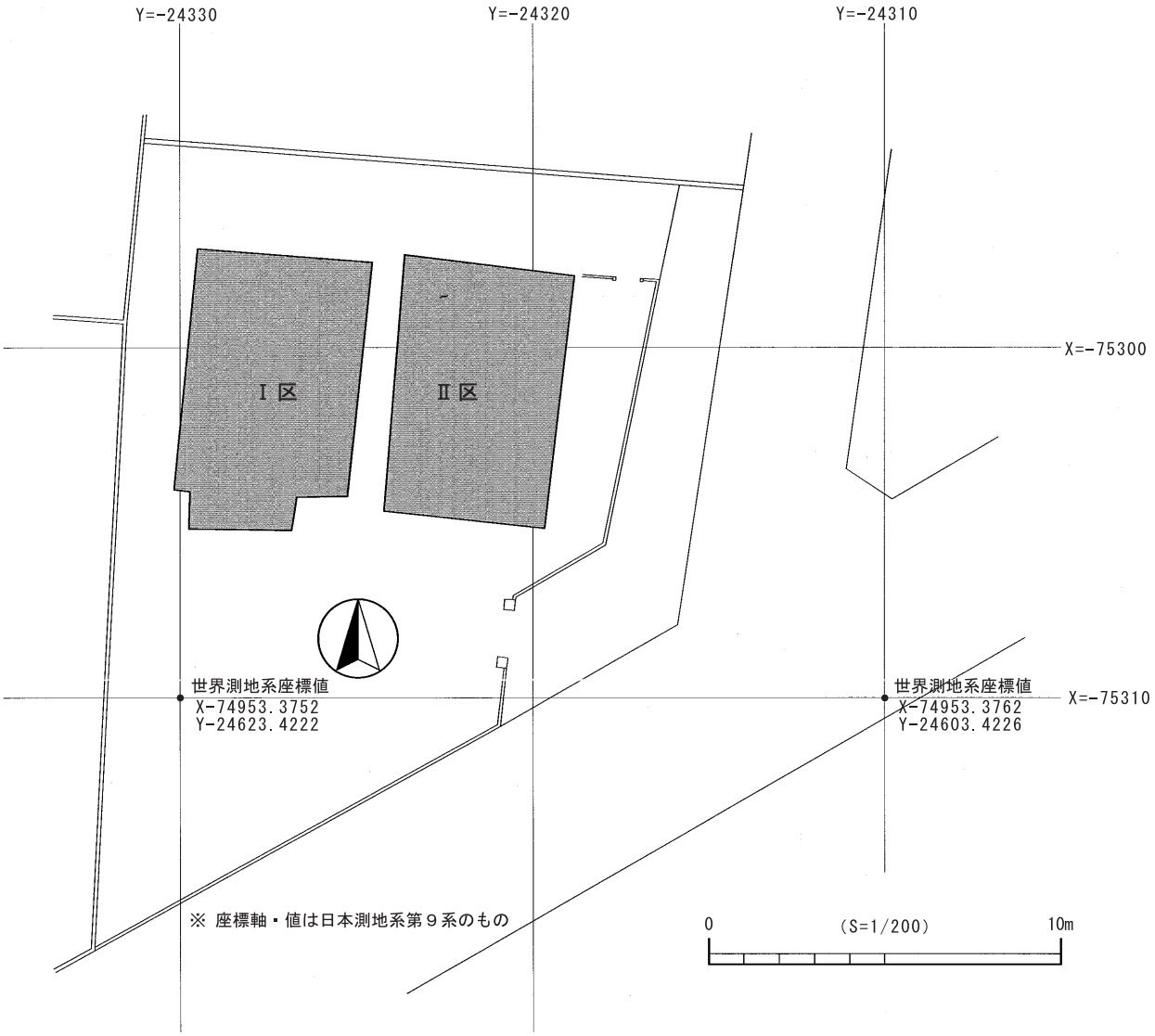
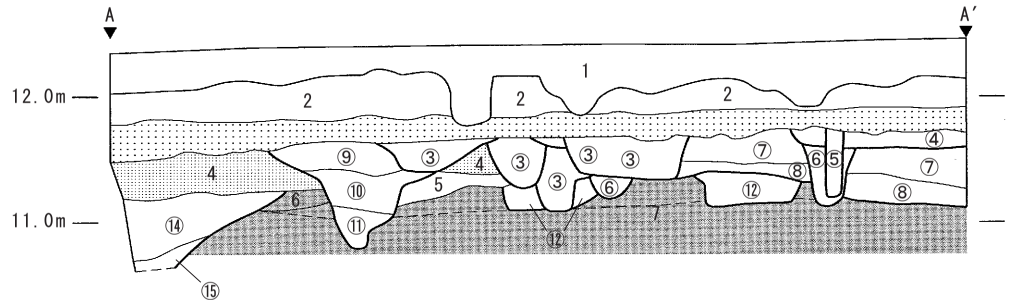
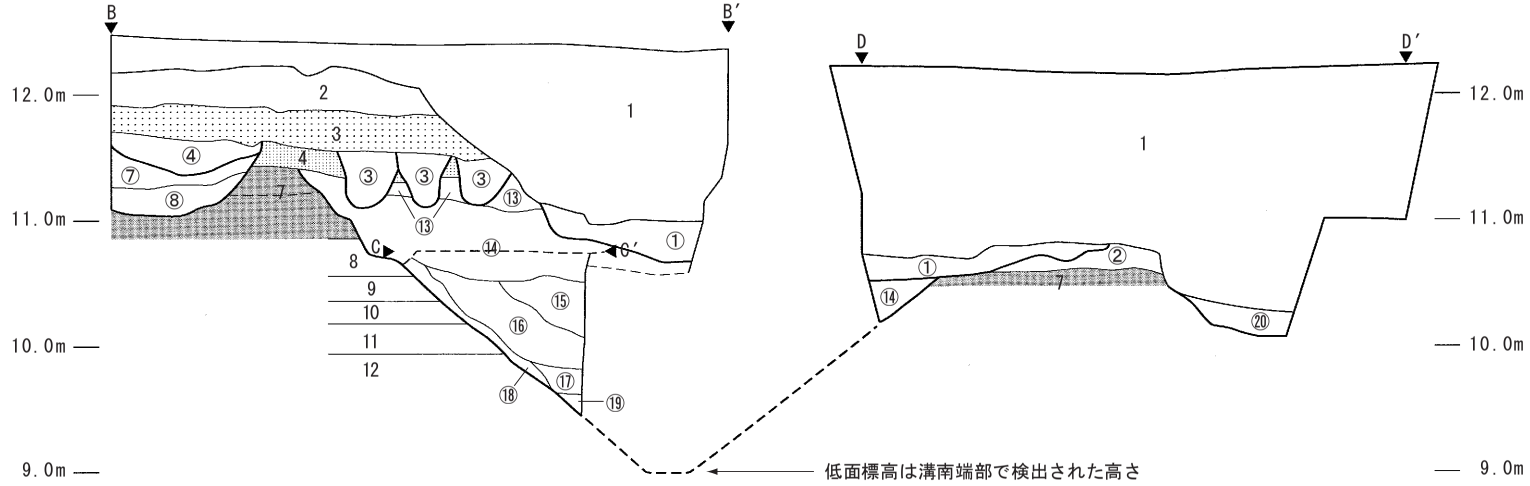


図２　調査区配置図



1. 暗褐色土　表土。現代撹乱。
2. 暗褐色土　砂性帯びる。近世～近代耕作土。
3. 暗褐色土　土丹粒・小ブロックを多く含む。かわらけ細片をやや多く含む。中世遺物含層。第１面
4. 暗褐色土　土丹粒・小ブロックをやや多く含む。若干砂性を帯びる。締まりあり。第２面
5. 暗褐色粘質土　４層と７層の混交土。締まりあり。
6. 黄白色粘質土　黒褐色粘質土混入。締まり強い。中世基盤層か？
7. 黒褐色粘質土　黄白色シルト粒を少量含む。締まり強い。中世基盤層。第４面
8. 明褐色粘質土　黒褐色粘質土小量混入。締まりあり。
9. 黄白色粘質土　青灰色粘質土少量混入。締まりあり。
10. 青灰色粘質土　黒褐色粘質土少量混入。強固に締まる。
11. 青灰色粘質土　黒褐色粘質土少量混入。締まりあり。
12. 青灰色粘質土　黒褐色粘質土少量混入。強固に締まる。



①暗灰褐色粘質土　土丹粒を微量含む。下位に暗茶褐色粘質土混入。締まりやや弱い
②暗褐色土　４層に近似。
③暗褐色土　土丹小ブロックを多く含む。
④暗褐色土　炭化物を多く含む。かわらけ片を多く含む。土丹粒を少量含む。
⑤暗褐色土　④層に近似。
⑥暗褐色土　③層に近似。
⑦暗褐色土　土丹粒をやや多く含む。褐鉄混入し、粘性帯びる。
⑧黒褐色粘質土　７層に近似。褐鉄混入し締まりやや弱い。
⑨暗褐色土　③層に近似。
⑩暗褐色土　③層に近似。
⑪黒褐色土　７層に近似。褐鉄多く含む。
⑫黒褐色粘質土　７層に近似。黄白色粘質土ブロック・黄白色シルト粒混入。締まりあり。
⑬暗褐色土　土丹小ブロックを少量含む。粘性帯び、締まりあり。
⑭暗褐色粘質土　土丹粒・小ブロックを少量含む。炭化物微量含む。締まりあり。
⑮暗茶褐色粘質土　腐植土質。土丹粒を微量含む。
⑯黒褐色土　土丹粒・小ブロックをやや多く含む。締まりあり。
⑰暗茶褐色粘質土　腐植土質。締まり弱い。
⑱青灰色粘質土　10層に近似。黒褐色粘質土混入。粘性強い。
⑲黒褐色粘質土　土丹粒を少量含む。
⑳黒褐色粘質土　７層に近似。土丹粒・小ブロック少量含む。

0　(S=1/60)　2m

図３　堆積土層

２．堆積土層（図３）

厚さ約30 ㎝の表土層（１層）を除去すると、標高約12.1 ｍで近世以降の耕作土層（２層）上面が現れる。明治前期の迅速測図では当地域には畑との表記が見られ、この頃には耕作地として利用されていたようである。

厚さ約30 ㎝を測る耕作土の下層は、土丹粒・小ブロックを多く含む暗褐色土により構成される中世遺物包含層（３層）が堆積する。近世以降の耕作により削平を受けているものと思われ、上面は生活面と認められるものではなかったが、これを第１面とした。面標高約11.8 ｍを測る。

第１面より約20 ㎝掘り下げると、土丹粒・小ブロックをやや多く含む砂性を帯びた暗褐色土（４層）となり、この上面を第２面とした。面標高約11.6 ｍを測る。

第２面より約20 ㎝掘り下げると、北半部では中世基盤層が露出し、南半部にはローム土を主体とし土丹粒を含む橙色土が基盤層上に地業されており、これを第３面とした。面標高は約11.4 ｍを測る。

第３面の地業層ははごく薄いものであり、最大でも約10 ㎝の厚さであった。この地業層を除去すると、全面的に黒褐色粘質土（７層）が現れる。これが中世基盤層となる自然堆積層であり、第４面とした。面標高約11.3 ｍを測る。第４面では中世遺構のほかにこれを遡る時代の遺構も確認され、検出面としては同一面となるものの、中世遺構を４Ａ面、それ以前の遺構を４Ｂ面に区分した。

第４面以下の堆積層については、遺構の壁面を利用して堆積層の確認を行った。計６層の自然堆積層を確認することができ、10 層以下の粘質土層はグライ化し青味がかった様子が認められる。

第３章　検出された遺構と遺物

ここでは各面で検出された主な遺構・遺物についての説明を加えていくこととする。Ⅰ区東半以東は現代撹乱により標高約10.7 m以上が削り取られており、Ⅱ区で平面的に検出できたのは第４面のみである。

第１面

近世耕作土を除去した中世遺物包含層の上面である。面標高は約11.8 mを測る。検出された遺構はすべて現代遺物を含む。既存建物の基礎痕跡と思われるピットのほか、Ⅰ区東半以東は標高約10.7 mまで大きく削り取られ、窪地状を呈していた。この現代撹乱は、南を主軸とした場合の方位がN－169°－Eを指し、N－170°－Wを指す現在の東御門川流下方位に近い。東御門川の暗渠化工事に伴うものだろうか。

［出土遺物］

表土掘削から第１面までの掘り下げ時に出土した遺物のうち、中世に比定されるものを選別して図４-1 ～23 に示した。1 ～14 はかわらけ。5 ～10・13,14 は手づくね成形で、10 はコースターと呼称する極小型のもの。13,14 は油煙が付着し、灯明皿に転用されている。15,16 は常滑甕。17 は山茶碗窯捏ね鉢。18 は青磁蓮弁文碗。19 は瓦器碗。20 は管状土錘。21 は砥石。仕上砥。22,23 は銭。22は□□通寶。皇宋通寶のように思われるが、錆が多く判然としない。23 は紹聖通寶。

第２面

土丹粒・小ブロックをやや多く含む暗褐色土で構成される。明瞭な地業面ではなかったが、やや砂質の生活面と認識している。本面からは溝１条、溝状遺構２条、かわらけ溜まりのほか、柱穴・土坑類をいくつか検出している。柱穴には底面に礎板を伴うものも検出されているが、配列は判らなかった。

［遺構１-ｂ］溝

Ⅰ区東端部で検出され、調査区を南北に貫く。現代撹乱と重複しており平面的には第３面で検出されたものであるが、出土遺物の型式から本面へ帰属するものであることが判った。覆土は上位が第２面構成土に似た暗褐色土、下位が腐食土質の茶褐色土を含む暗灰褐色粘質土で構成される。東半部は現代撹乱により削平を受けておりⅡ区では平面的に検出することができなかったが、調査区北壁で確認できた規模は幅約5.4 m、深さ約90 ㎝を測る。底面標高は北端で約10.7 m、南端で約10.6 mを測り、流下方位は南と考えられる。流下方位はN－174°－Wを指す。Ⅰ区南端付近において、溝底面に打ち込まれた直径３㎝・５㎝の丸杭各１本と幅約９㎝の板杭、約４㎝角の角杭の計４本が検出されているが、護岸とするには整然とした配置になく強度にも乏しい印象であり、用途は不明である。

出土遺物は図８-1 ～20 に示した。1 ～13 はかわらけ。4 ～13 は手づくね成形のもの。14 は須恵器坏。混入した古代遺物であろう。15 は土丹加工品、用途は不明。中央に直径1.5 ㎝の穿孔が貫通し、下部はアーチ形に削り取られている。表面・裏面は比較的平滑である。16 ～20 は木製品。16,17 は曲物の底板。17 には漆状の黒色付着物が認められる。18 は板草履。19,20 は用途不明。19 は下部に木釘が打ち込まれ、漆状の付着物が認められる。

［遺構２］かわらけ溜まり

Ⅰ区北西角で検出された。検出標高約11.6 m。東西約50 ㎝ × 南北約80 ㎝の範囲で検出され、調査区外北・西まで広がることが推測される。約10 ㎝の厚さに層を成しており、最下層のかわらけを取り上げた底面の標高は約11.5 mを測る。平面的に土坑などの掘り込みを検出することはできなかったが、

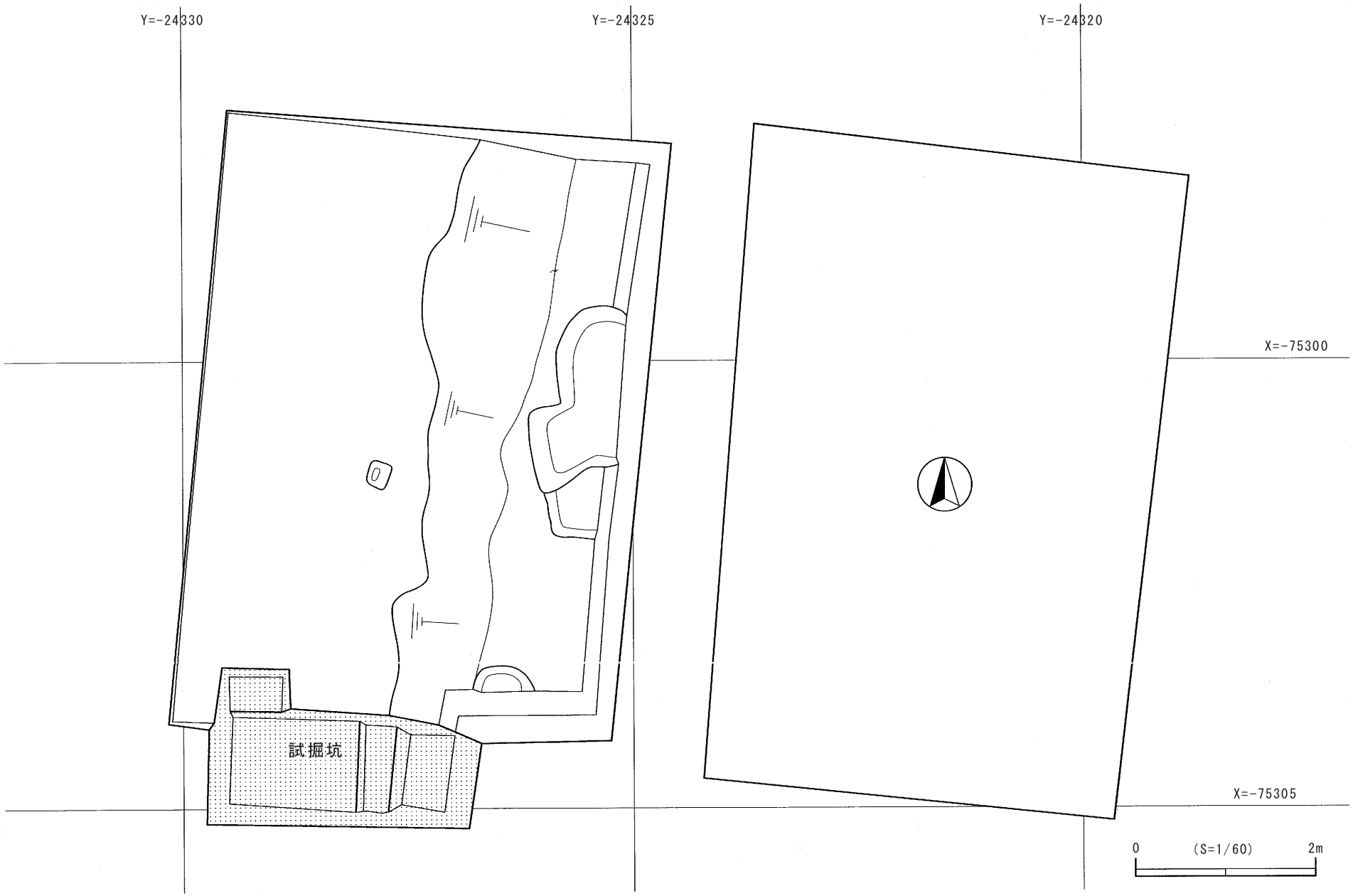


図４　第１面全体図

調査区断面を観察したところ浅い窪み状の落ち込みとなっており、これを利用して廃棄したものと思われる。また遺構３と同様に、覆土には炭化物が多く含まれていた。

出土遺物は図８-21 ～ 38 に示した。21 ～ 38 まですべてかわらけ。25 ～ 32、34 ～ 38 は手づくね成形のもの。

［遺構６］溝状遺構

Ⅰ区北部を東西方向に延びる。西は調査区外に延び、東は現代撹乱により失われている。覆土は土丹小ブロックを多く含む暗褐色土で構成される。規模は幅約 130 ㎝、深さ約 10 ㎝を測る浅いもので、底面標高は西端で約 11.5 ｍ、東端で約 11.4 ｍを測り、溝であれば流下方位は東と考えられる。流下方位はＮ－ 74 °－Ｅを指す。

出土遺物は図９-1 ～ 12 に示した。1 ～ 12 まですべてかわらけ。9 ～ 12 は手づくね成形のもの。

［遺構７］溝状遺構

Ⅰ区南部を東西方向に延びる。西は調査区外に延び、東は現代撹乱により失われている。覆土は土丹小ブロックを多く含む暗褐色土で構成される。規模は幅約 160 ㎝、深さ約 20 ㎝を測る。底面標高は西端で約 11.4 ｍ、東端で約 11.3 ｍを測り、溝であれば流下方位は東と考えられる。流下方位はＮ－ 94 °－Ｅを指す。

出土遺物は図９-13 ～ 23 に示した。13 ～ 17 はかわらけ。13 は油煙付着し灯明皿に転用されている。15 ～ 17 は手づくね成形のもの。18 は常滑壺。鳶口壷の底部片と思われる。19 は山茶碗窯捏ね鉢。20 は瀬戸瓶子。21 は青磁蓮弁文碗。22 は青白磁合子蓋。23 は銭。元祐通寶。

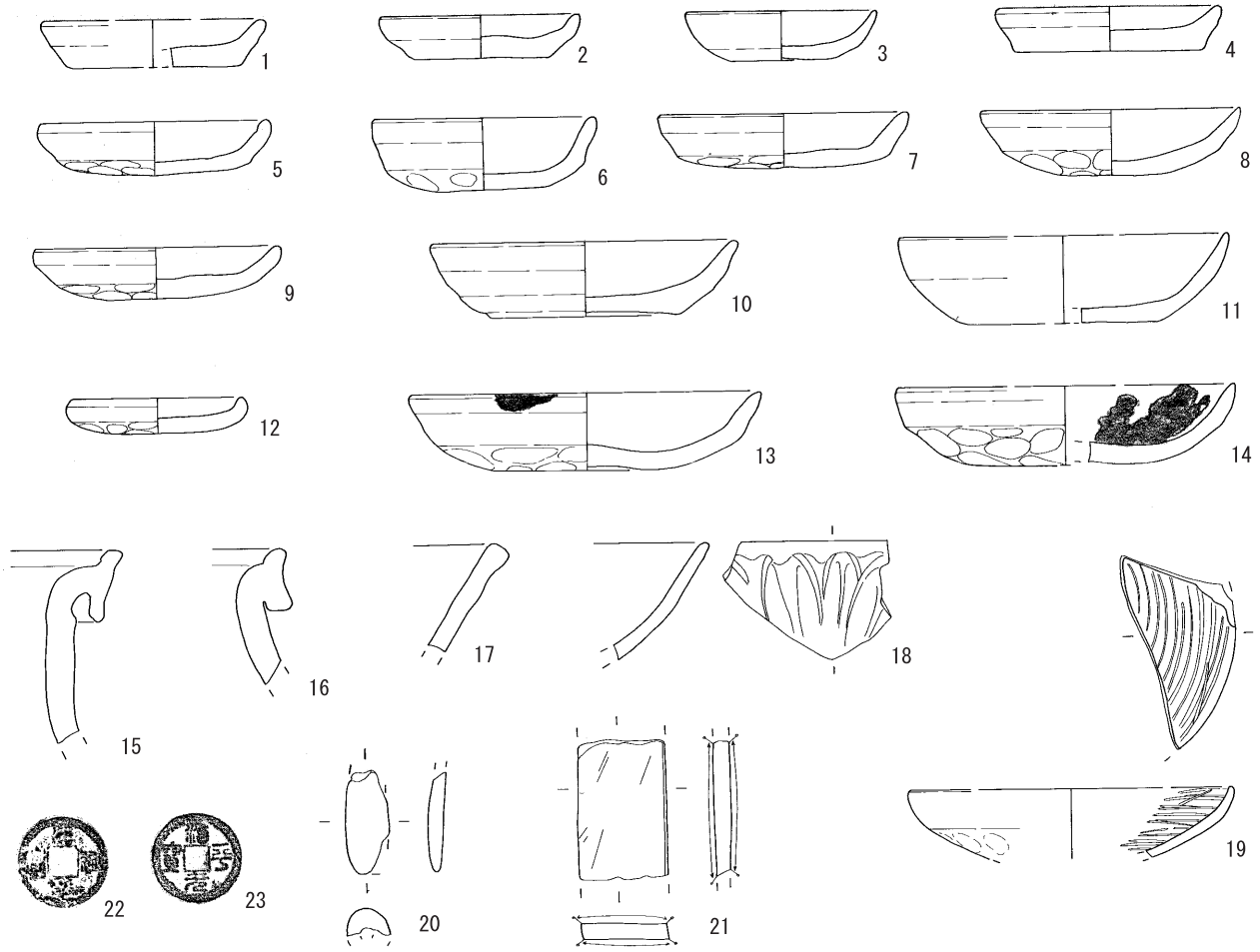


図５　第１面出土遺物

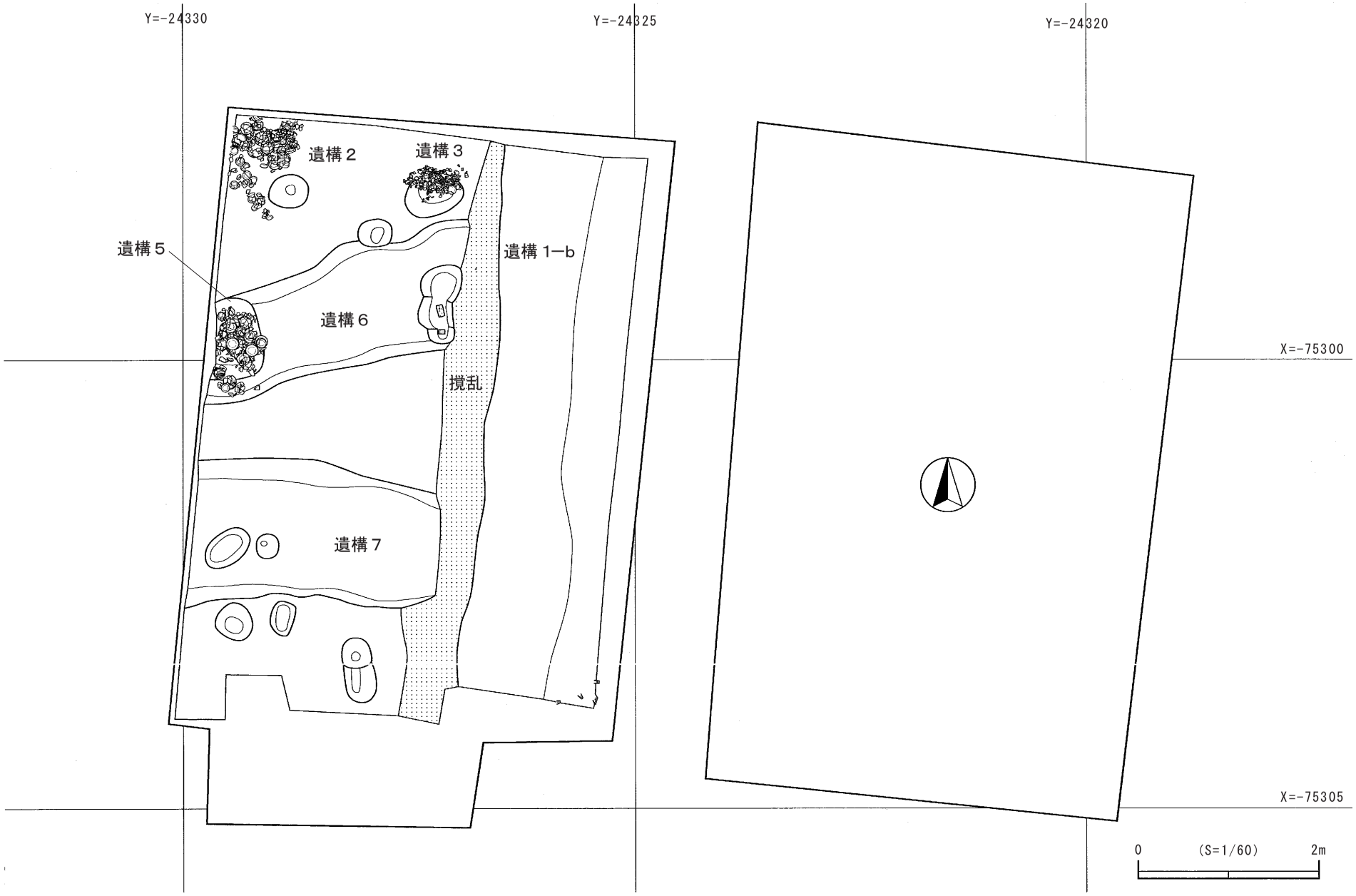

Y=-24330
Y=-24325
Y=-24320
X=-75300
X=-75305
遺構２
遺構３
遺構５
遺構１−b
遺構６
撹乱
遺構７
0
(S=1/60)
2m

図６　第２面全体図

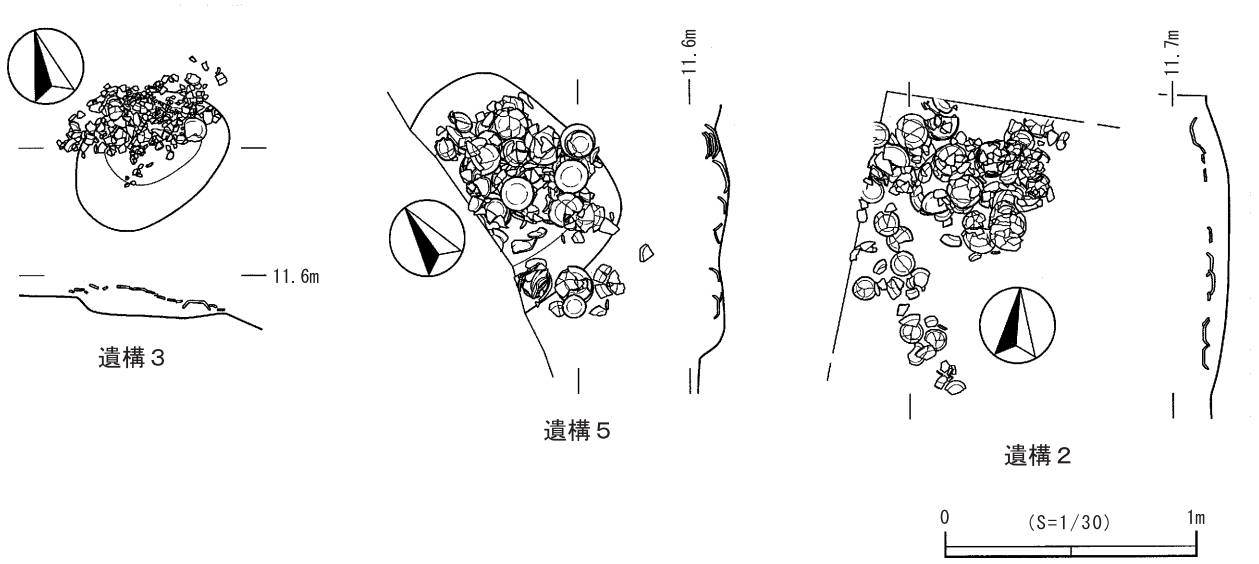


図７　第２面遺構微細図

［遺構３］土坑

Ⅰ区中央北部で検出された。覆土は炭化物を多く含む暗褐色土で、土坑北半部にはかわらけ細片が密に充填される。かわらけ細片は平面的にひとまとまりとなっている状態で検出されており、何かに包まれて廃棄された可能性も考えられ、覆土の炭化物はその残滓であるかもしれない。平面形は不整楕円形を呈し、土坑の規模は長軸約 70 ㎝×短軸 50 ㎝、深さ約 10 ㎝、底面標高約 11.45 ｍを測る。主軸方位はＮ－ 73 ゜－Ｅを指す。

出土遺物は細片がほとんどで、図示できたものは図９-24 のみである。24 はかわらけ。手づくね成形のもの。

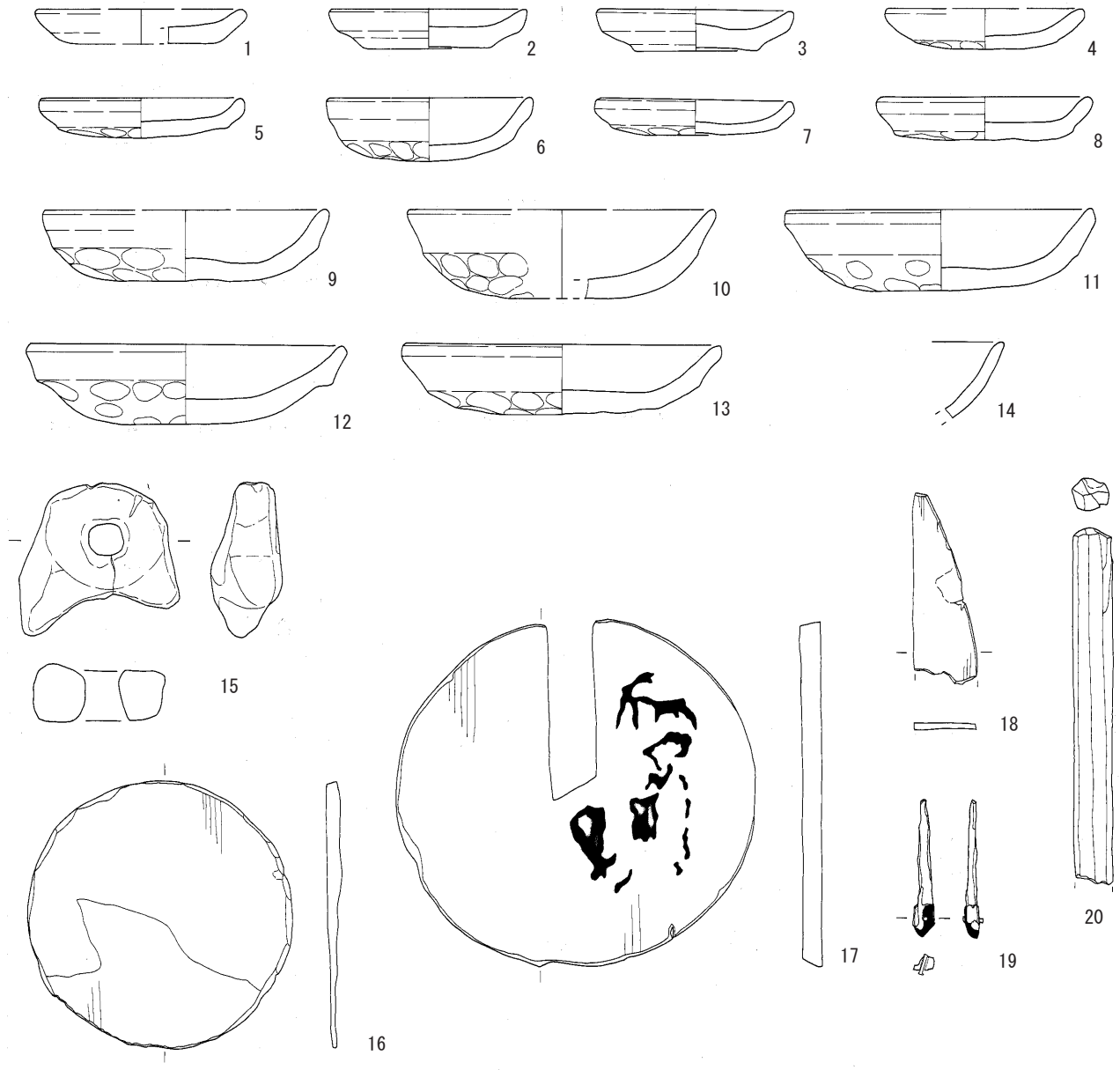
［遺構５］土坑

Ⅰ区西端で調査区壁にかかる状態で検出された。覆土は土丹小ブロックを多く含む暗褐色土で構成され、覆土上位から中位にかけてかわらけが集中的に出土した。このかわらけ溜まりでは、細片で原形を留めないものも多いが、ほぼ完形となるものも少なからず出土している。正位に重ねられた状態のものもいくつか認められ、多いものでは大皿１枚と小皿３枚の計４枚重ねられた状態であった。このことから、単に廃棄したというより埋納したものと捉えるべきであるかもしれない。本址は遺構６と重複しており、かわらけの出土状況から本址が新しい時期のものとなることが考えられる。平面形は方形に近い形を呈するものと思われ、規模は南北約 90 ㎝×東西 50 ㎝以上、深さは検出面より約 45 ㎝、底面標高約 11.15 ｍを測る。北を主軸とした場合の方位はＮ－８゜－Ｗを指す。

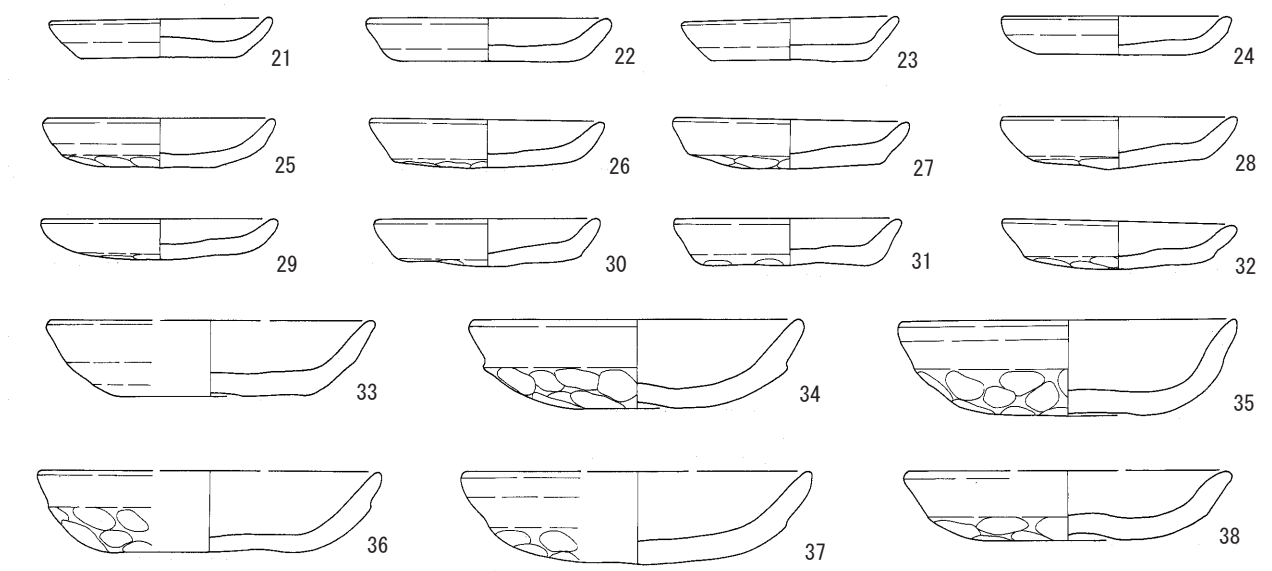
出土遺物は図 10-1 ～ 54 に示した。1 ～ 53 はかわらけ。20 は油煙付着し灯明皿に転用されている。21 ～ 32、36 ～ 53 は手づくね成形のもの。54 は青白磁合子蓋。

［遺構外出土遺物］

第１面から第２面までの掘り下げ時に出土した遺物を図 11-1 ～ 31 に示した。1 ～ 18 はかわらけ。11 ～ 13、17,18 は手づくね成形のもの。19 ～ 21 は山茶碗窯捏ね鉢。22 は常滑窯捏ね鉢。23 は青磁蓮弁文碗。24 は青白磁合子。25 は底面中央に穿孔の認められるかわらけ片。26は瓦質手焙り。27 は丸瓦。 28は滑石製の石鍋。29 は黒色碁石。30 は砥石。仕上砥。31 は銭。□□通寶。大觀通寶とも思われるが判然としない。



遺構１－ｂ



遺構２

図８　第２面遺構１－ｂ、２出土遺物

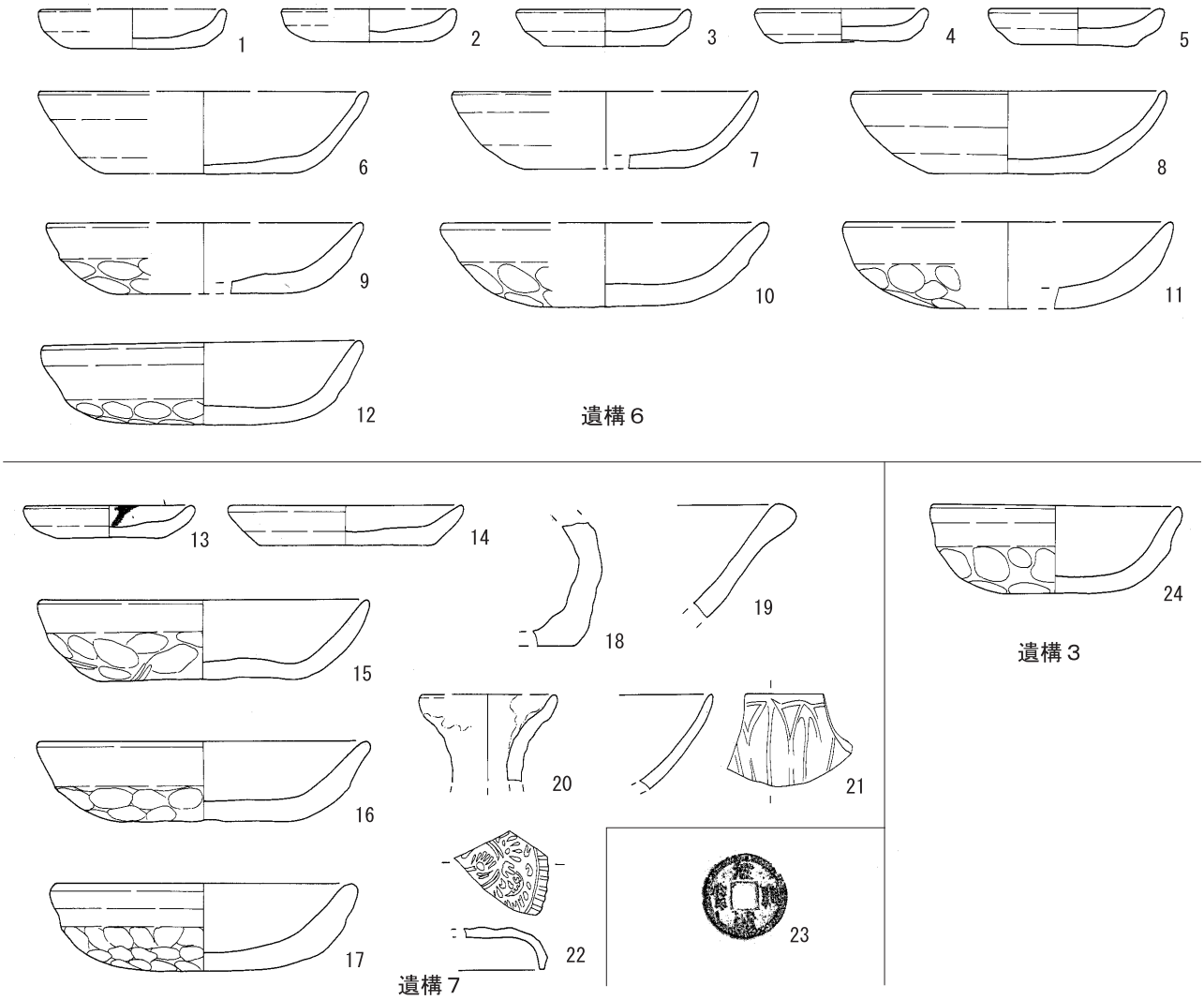


図９　第２面遺構６、７、３出土遺物

第３面

北半部では中世基盤層上面、南半部では基盤層上に薄く貼られた地業層上面が本面となる。地業層は関東ロームを主体とし土丹粒を含む橙色土で構成される。礎石列１列、溝状遺構１条のほか、多数の柱穴・土坑類を検出している。柱穴には底面に礎板を伴うもの、また柱の下端部が遺存するものもあったが、配列を見つけることはできなかった。

［礎石列］

Ｉ区南半部の中央付近で検出された。主軸方位はＮ－９°－Ｗを指す。礎石の間隔は芯々で北から約150 ㎝・約210 ㎝を測り均一でない。また、上面標高も北から約11.25 ｍ・約11.15 ｍ・約11.0 ｍと一定せず、遺構７-ｂなどと軸方位を全く異にしていることもあり、一連の配石と捉えられるものか判然としない。

［遺構７-ｂ］溝状遺構

Ｉ区南部を東西方向に延びる。西は調査区外に延び、東は遺構１－ｂにより失われている。覆土は基盤層に近似する黒褐色粘質土で、褐鉄を多く含む。幅約80 ㎝、深さ約10 ㎝を測り、底面標高は西端・東端ともに約11.1 ｍでほぼ平坦である。第２面遺構７とほぼ同じ位置にあるが、東を主軸とした場合の方位はＮ－100°－Ｅを指しやや南に振れる。中央付近の底面上に比較的まとまってかわらけが廃棄されている状況を検出している。

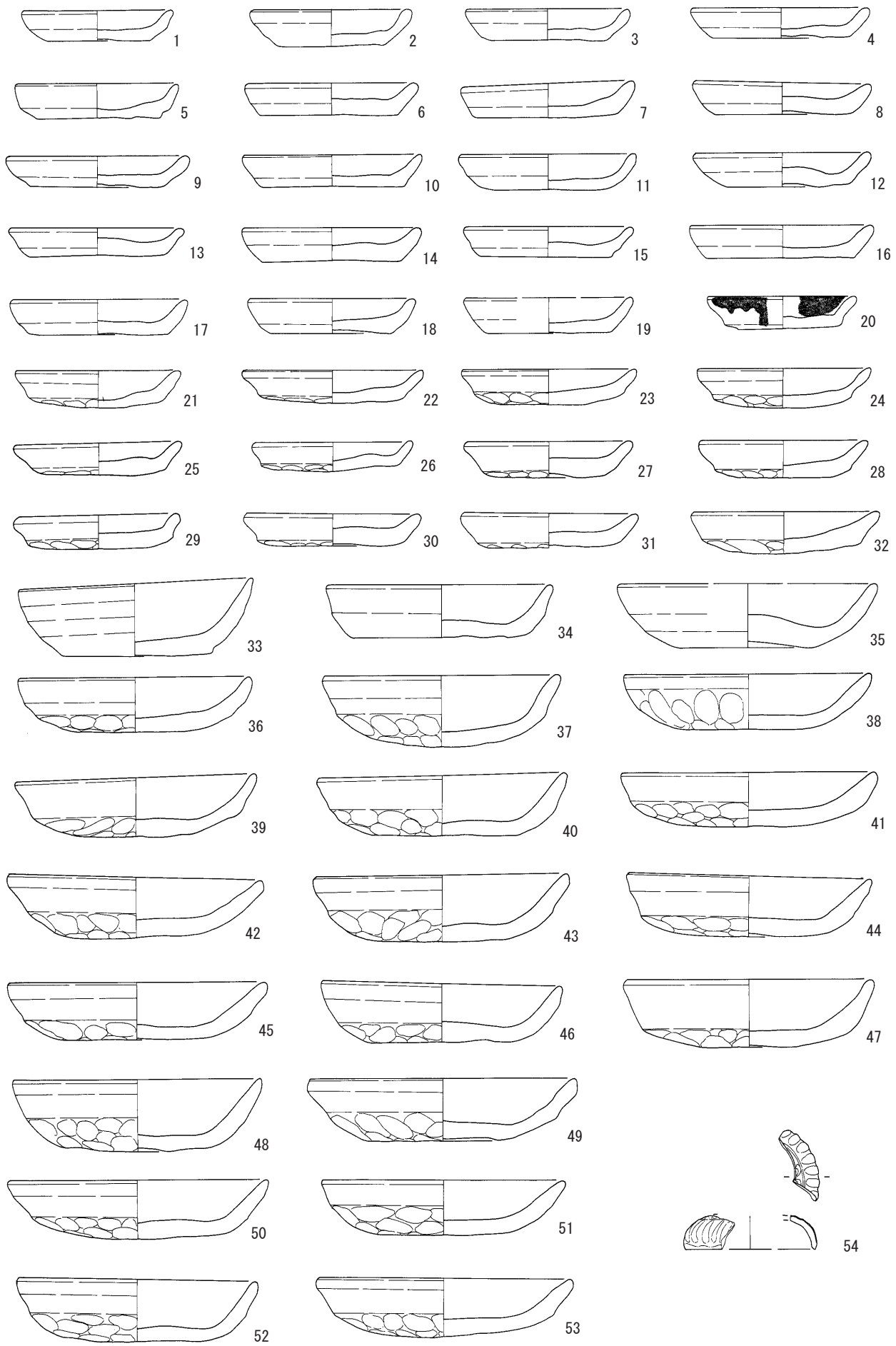


図１０　第２面遺構５出土遺物

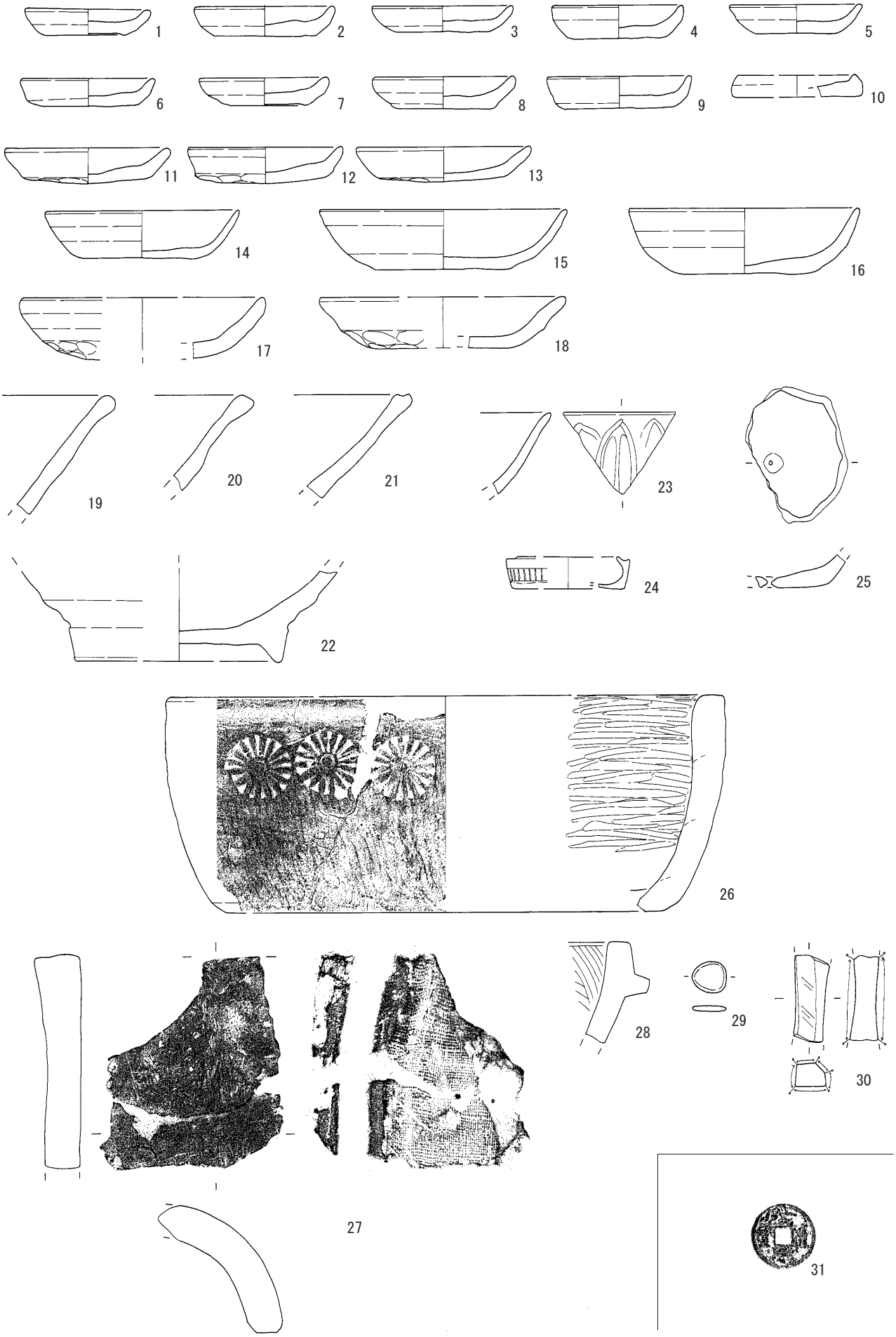


図１１　第２面遺構外出土遺物

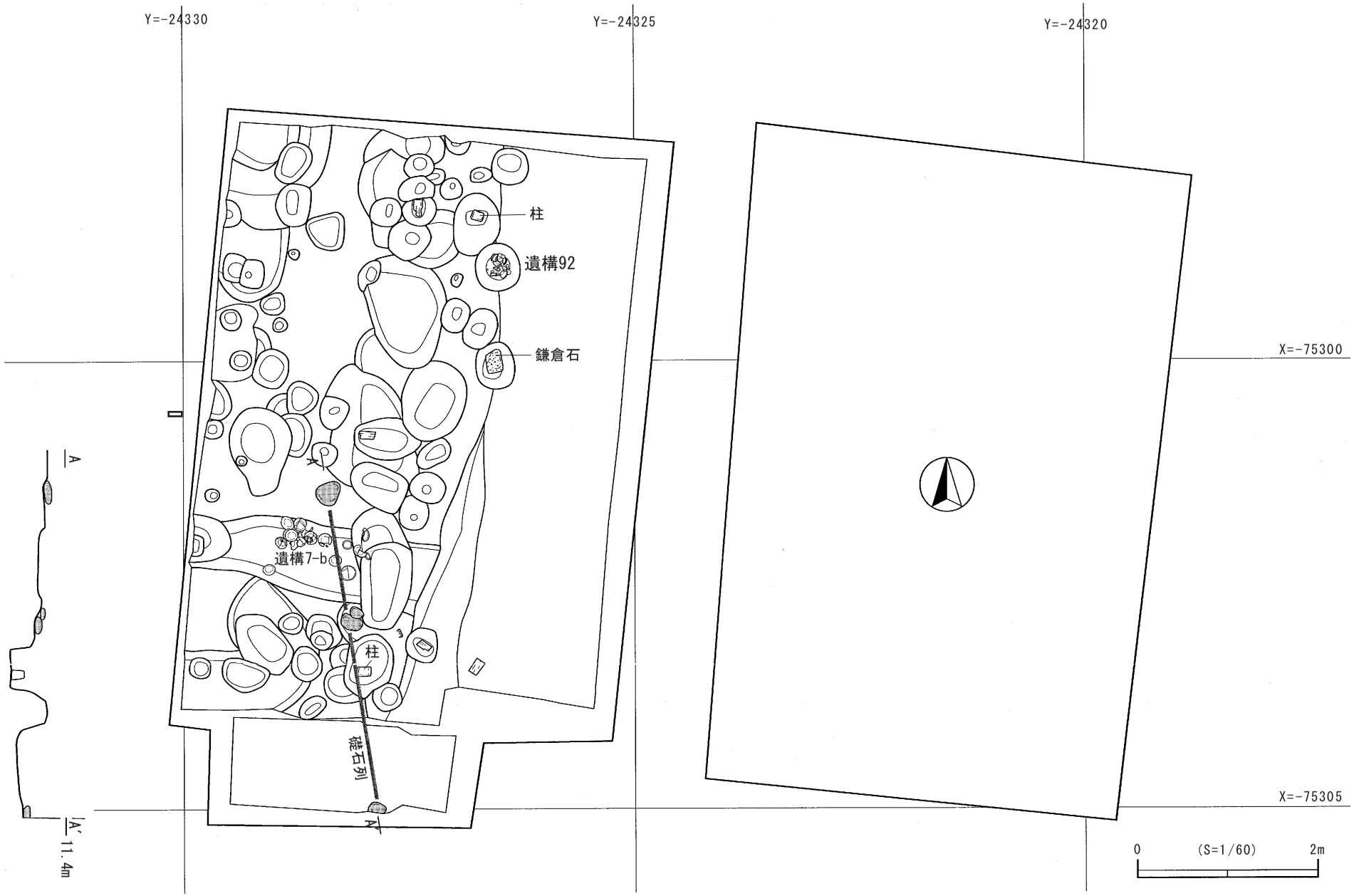

Y=-24330
Y=-24325
Y=-24320
X=-75300
X=-75305
柱
遺構92
鎌倉石
遺構7-b
柱
礎石列
A
A'
A
A'
11.4m
0
(S=1/60)
2m

図１２　第３面全体図

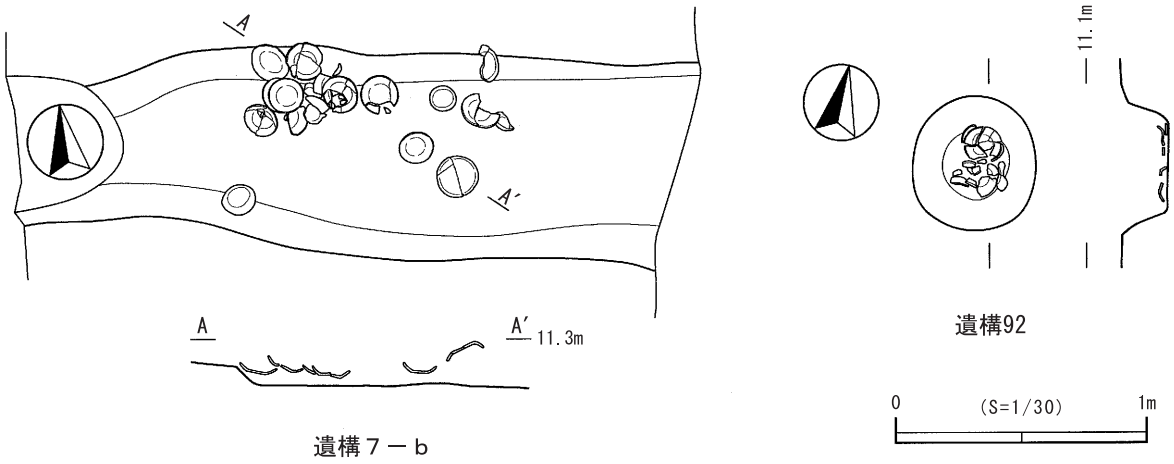


図１３　第３面遺構微細図

出土遺物は図14-1 ～19 に示した。1 ～19 まですべてかわらけ。7 ～19 は手づくね成形のもの。6,7 は油煙付着し灯明皿に転用されている。

［遺構 92］ピット

Ｉ区北東付近で検出された。第３面から第４面への掘り下げ途中で検出されたものであるが、覆土の特徴から本面に帰属するものと判断された。覆土は土丹小ブロックを少量含む暗褐色土で、粘性を帯びる。底面に最低３個体分のかわらけが検出されたが完形とならない破片もあり、埋納遺構ではなく単に廃棄したものと捉えた。平面形は略円形を呈し、規模は直径約 50 ㎝ × 第３面からの深さ約 50 ㎝、底面標高約 10.7 ｍを測る。

出土遺物は図 14-20 ～25 に示した。20 ～25 まですべてかわらけ。23 ～25 は手づくね成形のもの。

［土坑・ピット出土遺物］

遺構 26

出土遺物は図 14-26 ～28 に示した。26,27 はかわらけ。27 は手づくね成形のもの。28 は白かわらけ。口縁部片であるが器形は皿形を呈するものと思われ、口唇部を内側へ折り込んでいる。

遺構 56・66

出土遺物は図 14-29,30 に示した。29 はかわらけ。手づくね成形のもの。30 は常滑甕。

遺構 57

出土遺物は図 14-31 ～33 に示した。31,32 は青磁割花文小皿。33 は平瓦。

遺構 58

出土遺物は図 15-1 ～4 に示した。1 ～3 はかわらけ。3 は手づくね成形のもの。4 は瀬戸四耳壺の肩部片。耳は大部分が欠失している。

遺構 67

出土遺物は図 15-5 ～7 に示した。5 ～7 まですべてかわらけ。7 は手づくね成形のもの。

遺構 71

出土遺物は図 15-8 ～11 に示した。8 ～11 まですべてかわらけ。9 ～11 は手づくね成形のもの。

遺構 77

出土遺物は図 15-12 ～17 に示した。12 ～17 まですべてかわらけ。13 ～17 は手づくね成形のもの。16 は油煙付着し灯明皿に転用されている。

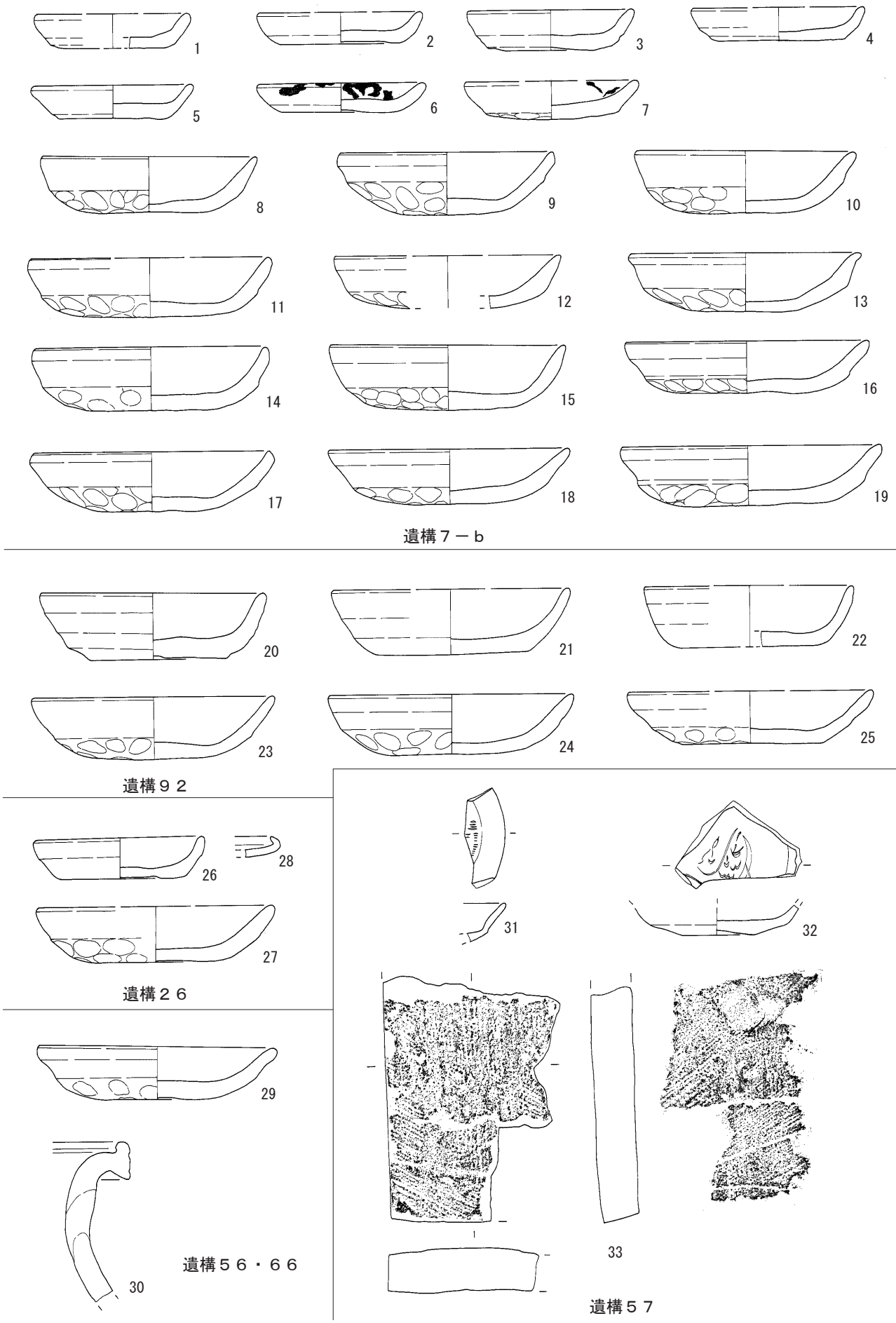


図１４　第３面遺構７－ｂ、９２、２６、５６・６６、５７出土遺物

遺構 51

出土遺物は図 15-18,19 に示した。18 はかわらけ。19 は砥石。中砥。

遺構 90

出土遺物は図 15-20 ～ 29 に示した。20 ～ 28 はかわらけ。26 ～ 28 は手づくね成形のもの。29 は山茶碗窯捏ね鉢。

遺構 78

出土遺物は図 15-30 に示した。30 は銭。紹聖通寶。

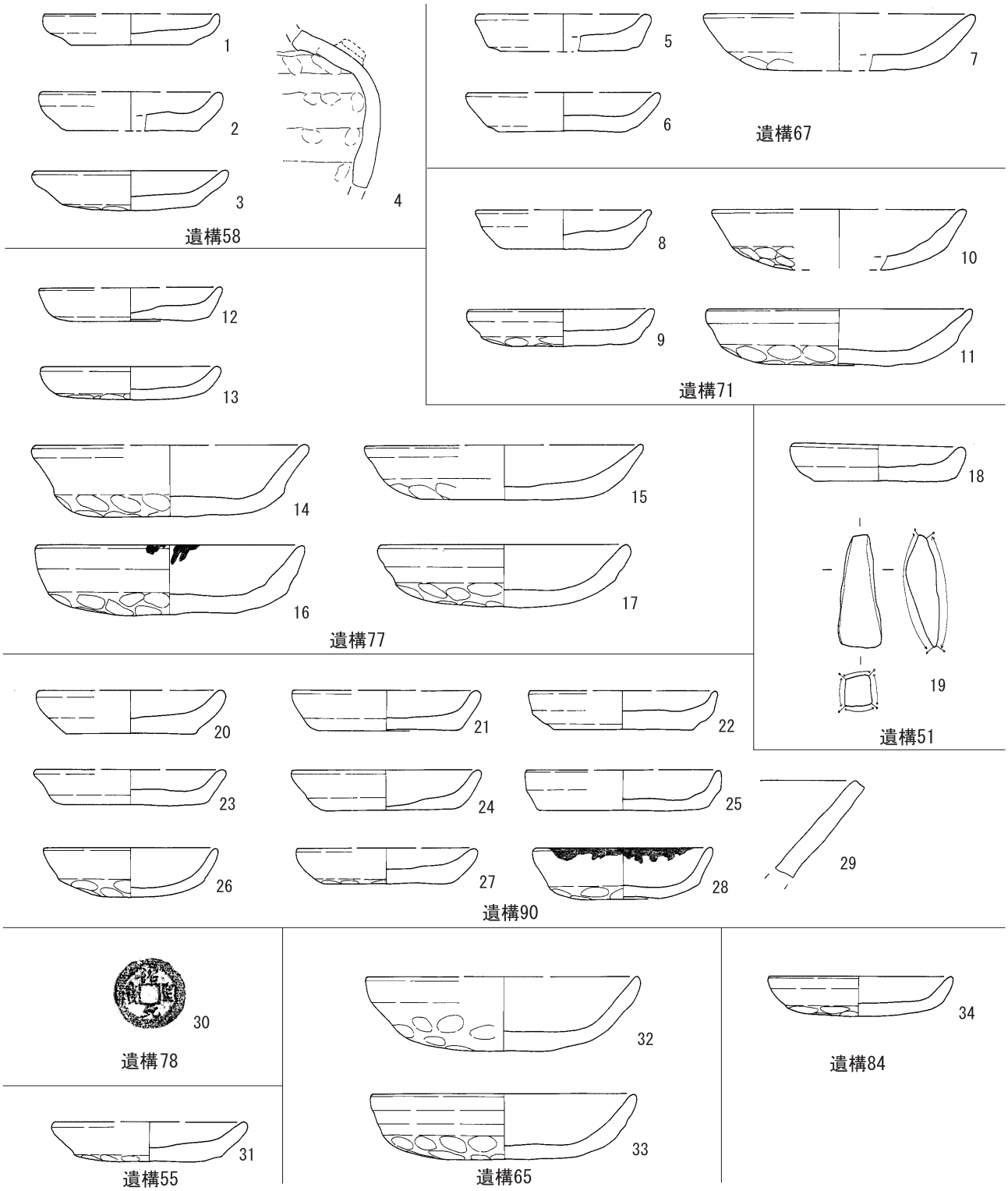


図１５　第３面遺構５８、６７、７１、７７、５１、９０、７８、５５、６５、８４出土遺物

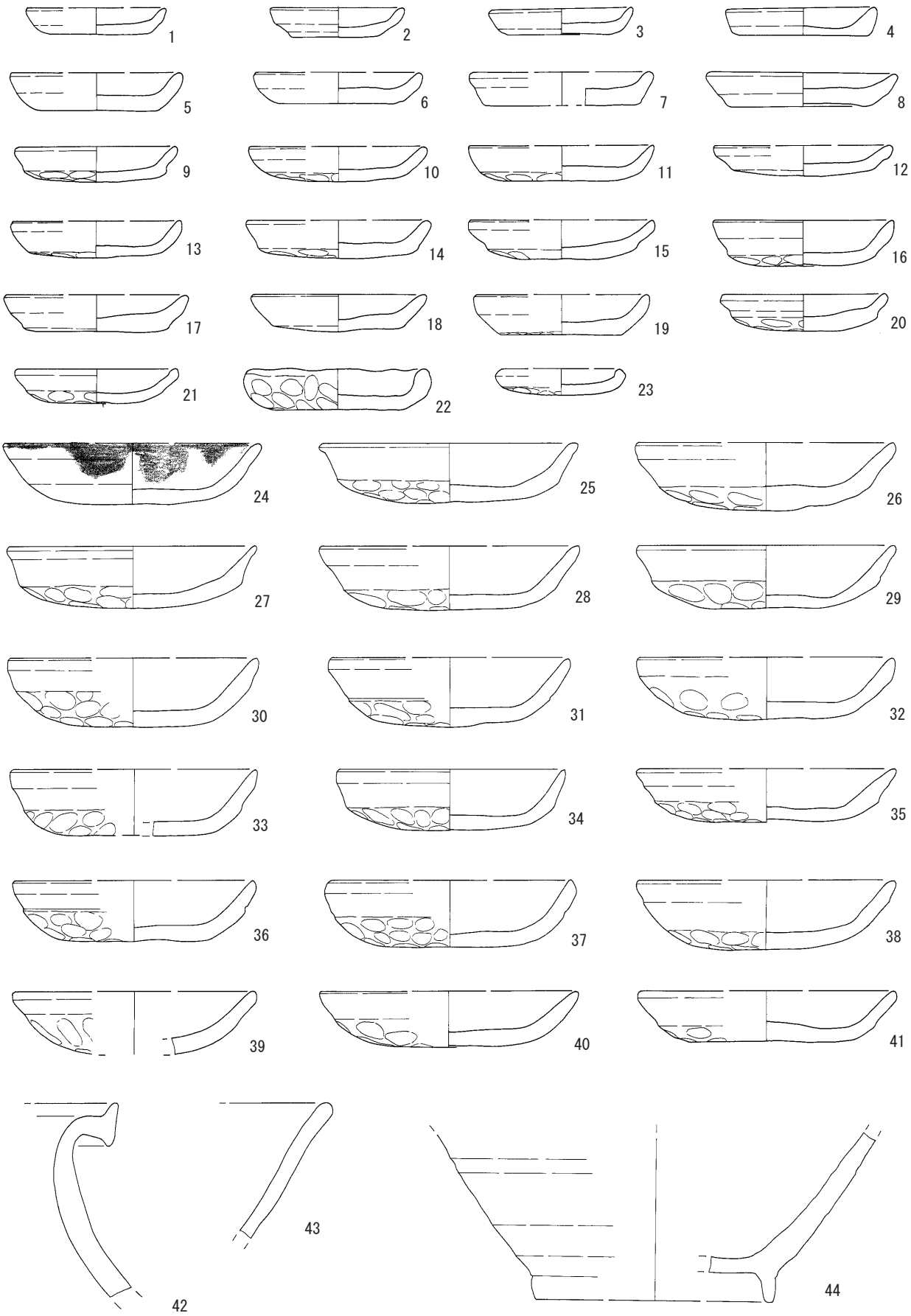


図１６　第３面遺構外出土遺物（１）

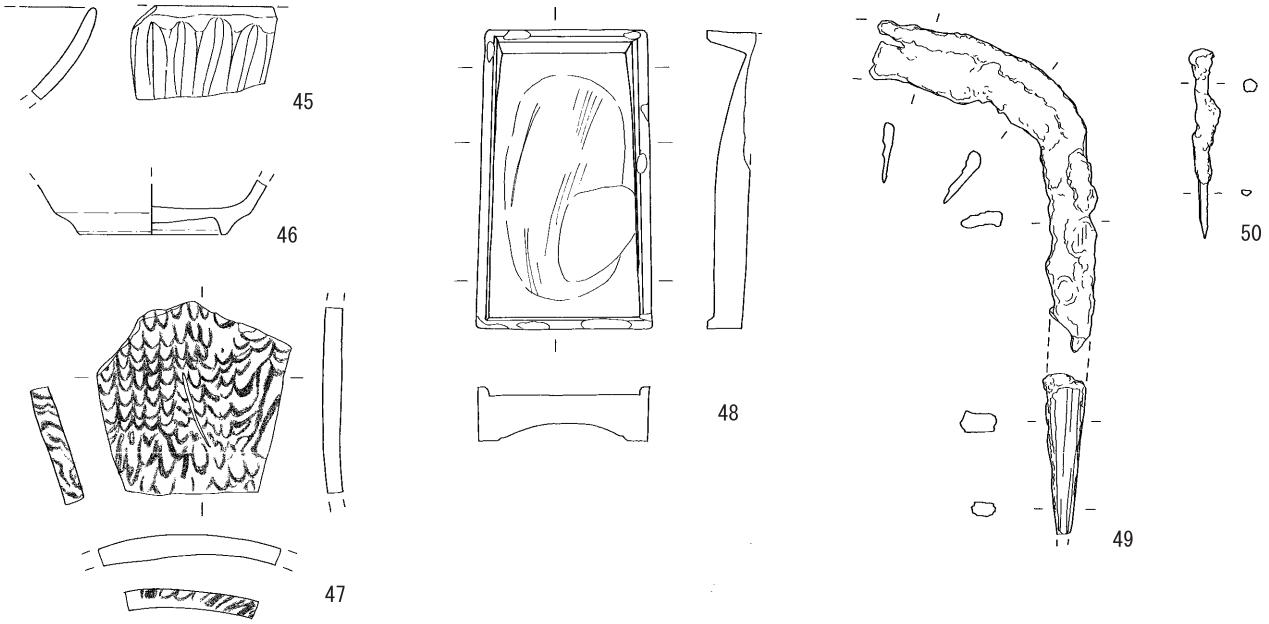


図１７　第３面遺構外出土遺物（２）

遺構 55

出土遺物は図 15-31 に示した。31 はかわらけ。手づくね成形のもの。

遺構 65

出土遺物は図 15-32,33 に示した。32,33 ともにかわらけ。手づくね成形のもの。

遺構 84

出土遺物は図 15-34 に示した。34 はかわらけ。手づくね成形のもの。

［遺構外出土遺物］

第２面から第３面までの掘り下げ時に出土した遺物を図16・17-1 ～50 に示した。1 ～41 はかわらけ。9 ～ 41 は手づくね成形のもの。23 はコースターと呼称する極小型かわらけ。24 は油煙付着し灯明皿に転用されている。42 は常滑甕。43,44 は山茶碗窯捏ね鉢。45 は青磁蓮弁文碗。46 は青磁腰折鉢。47 は黄釉絞胎片。体部片ではあるが壷と思われる。48 は石製硯。49 は鎌状の鉄製品。中子の部分には木質が付着している。50 は鉄釘。

第４Ａ面

自然堆積層と思われる黒褐色粘質土で構成され、中世基盤層と捉えられる。南北溝２条のほか、Ⅱ区ではこれらに挟まれる空間に多数の小穴を検出している。これらの小穴群は締まりのない暗灰色粘質土を覆土にもち現代撹乱である可能性も考えられるが、遺物が出土しておらず判然としないことから、本面で扱うこととした。

［遺構 91］溝

Ⅰ区東端からⅡ区西端に跨る位置で、調査区を南北に貫く。覆土は上層が土丹小ブロックを少量含む暗褐色粘質土、中層が腐植質の暗茶褐色粘質土、下層が土丹小ブロックをやや多く含む黒褐色土、最下層に再び腐植質の暗茶褐色粘質土が堆積する。Ⅱ区ではごく狭小な範囲を検出したのみであるが、推定幅は約 5.1 ｍ、深さは約 2.6 ｍを測る。Ⅰ区・Ⅱ区の調査区北壁を合成したところ、底面を境に左右対称なＶ字の薬研堀となることが推測され、その場合底面幅は 30 ～ 40 ㎝程度であろうと考えられる。

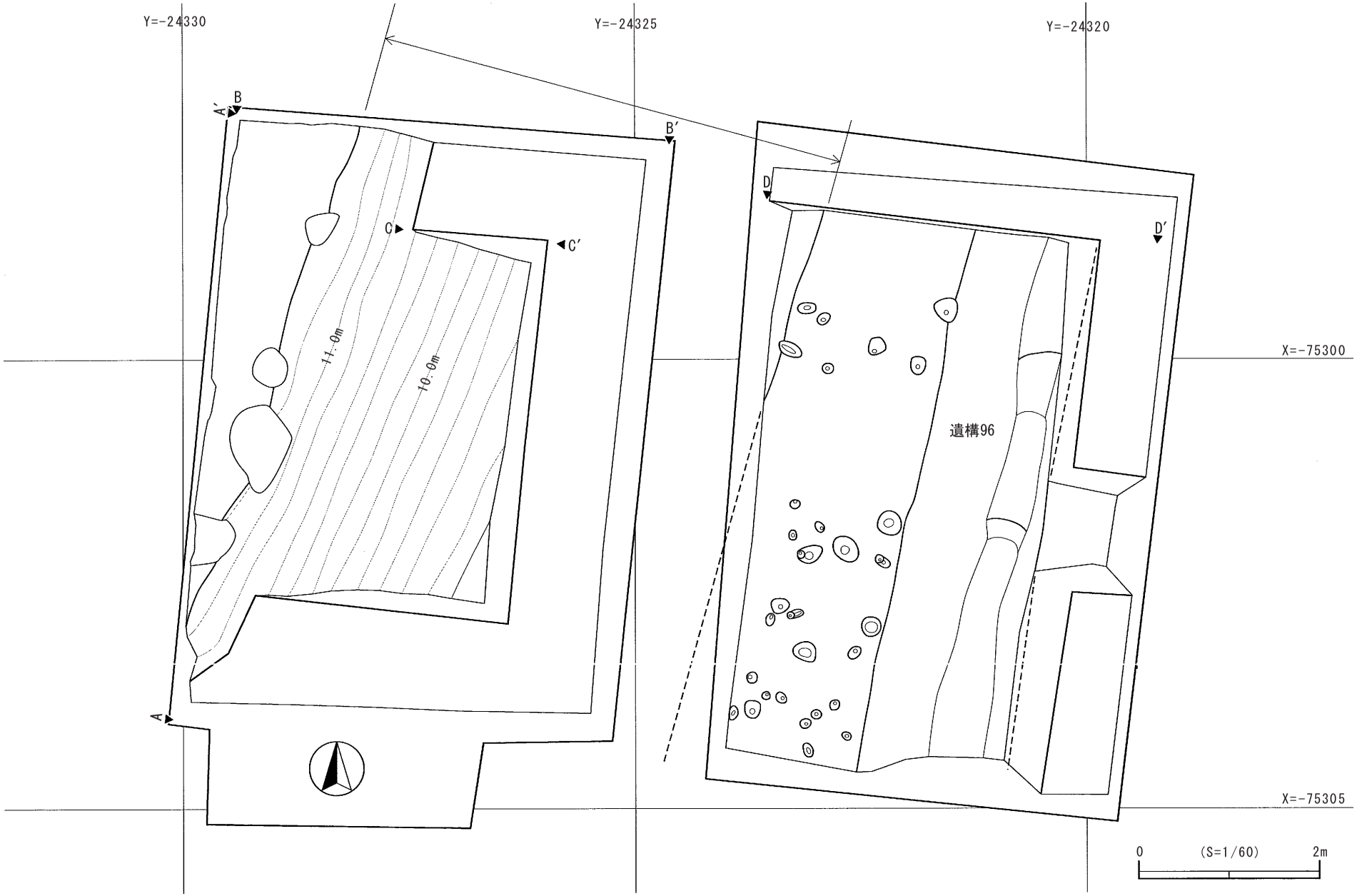

Y=-24330
Y=-24325
Y=-24320
X=-75300
X=-75305
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
11.0m
10.0m
遺構96
0
(S=1/60)
2m

図１８　第４Ａ面全体図

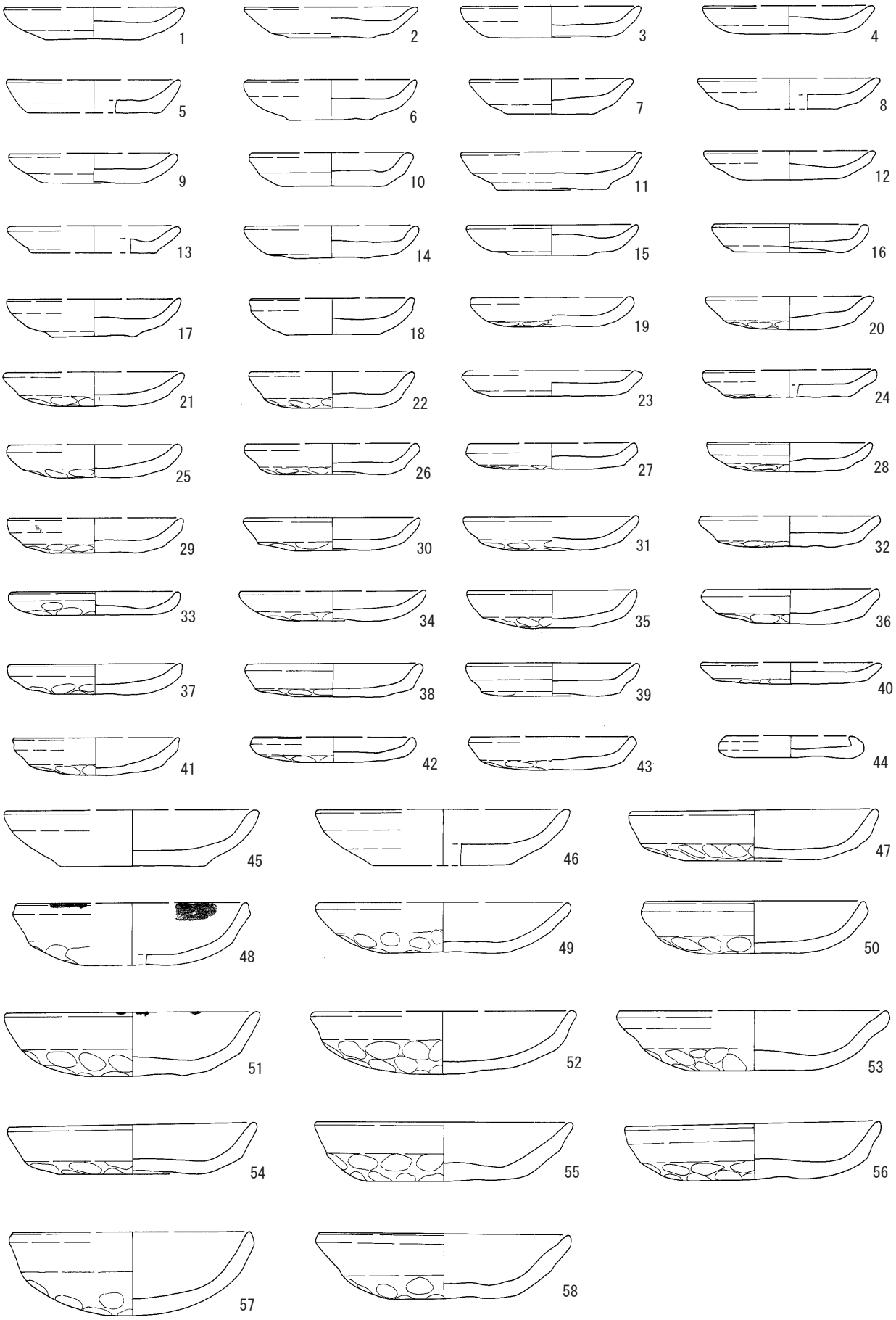


図１９　第４Ａ面遺構９１出土遺物（１）

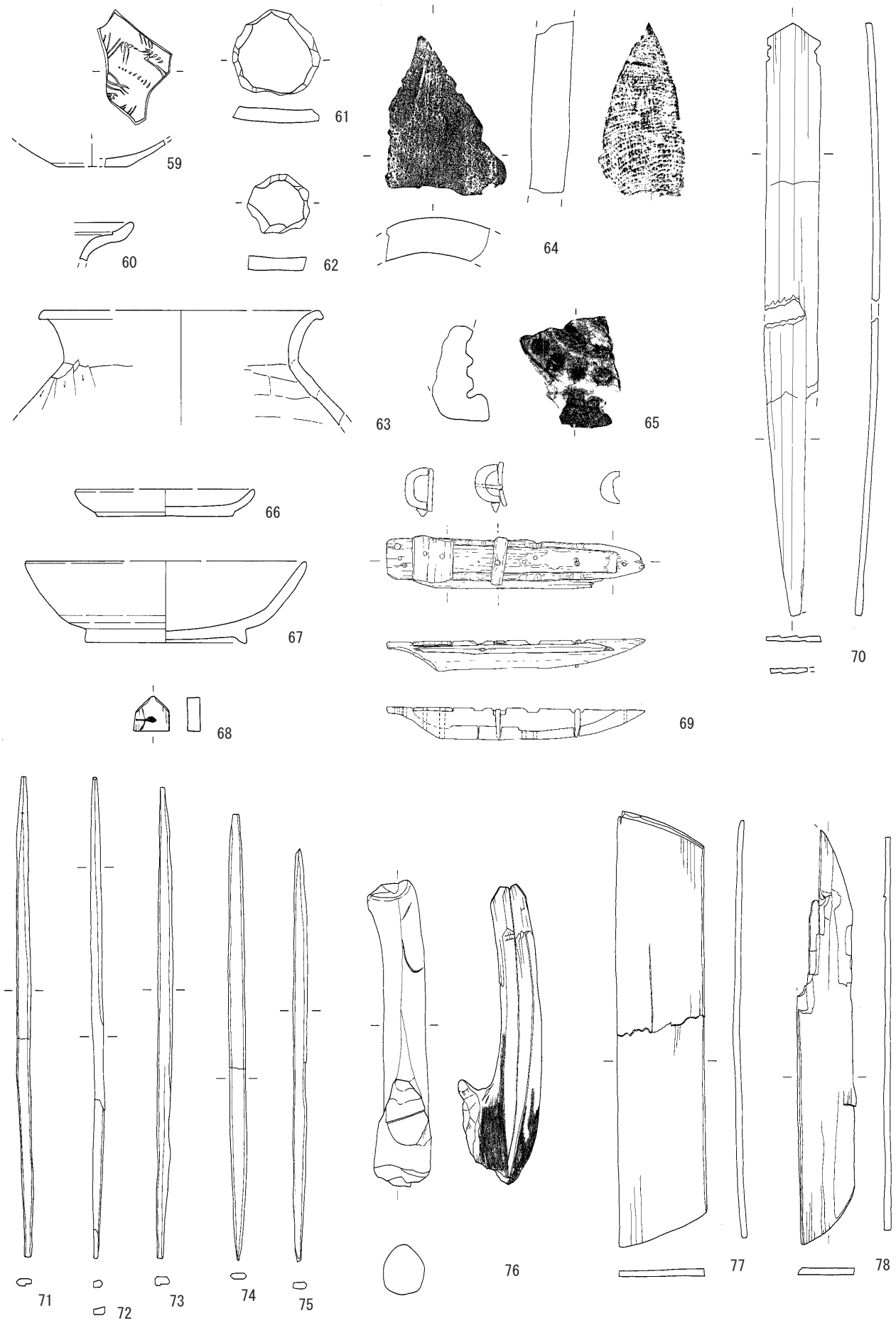


図２０　第４Ａ面遺構９１出土遺物（２）

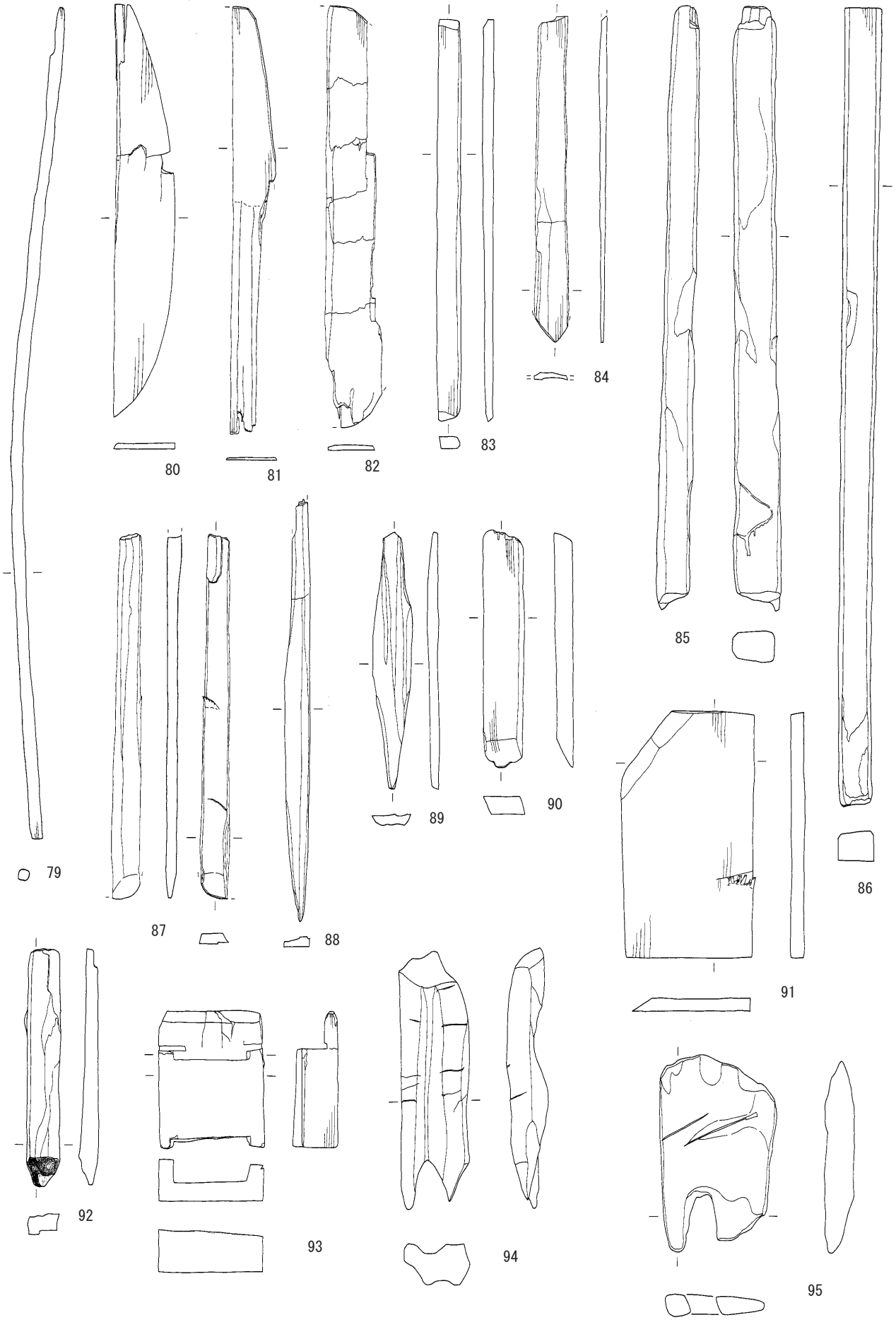


図２１　第４Ａ面遺構９１出土遺物（３）

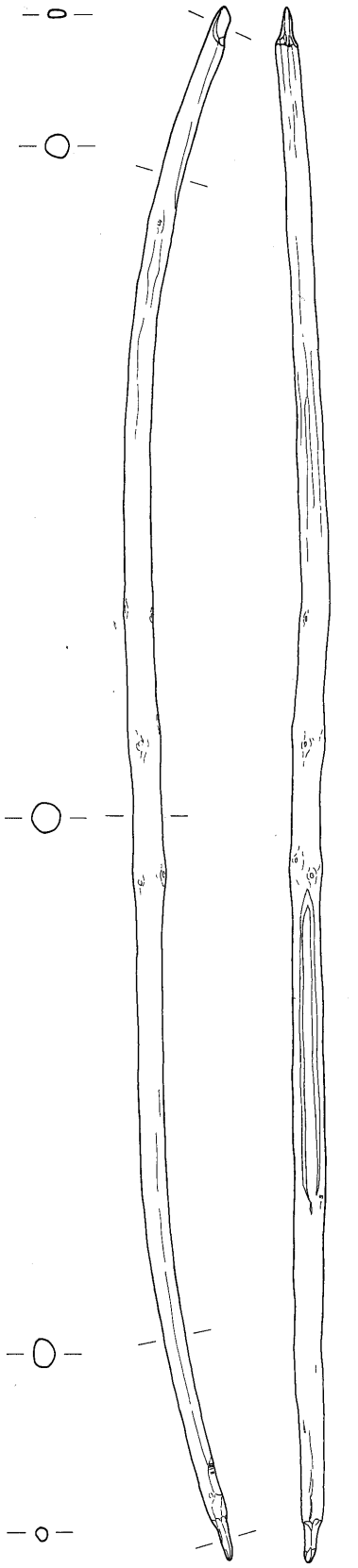


図２２　第４Ａ面遺構９１
出土遺物（４）

底面はＩ区南端部でわずかに検出できたのみで、底面南北での比高差は不明。南を主軸とした場合の方位はＮ－160°－Ｗを指す。

出土遺物は図19～22-1～96に示した。1～58はかわらけ。19～58は手づくね成形のもの。44はコースターと呼称する極小型かわらけ。48,51は油煙付着し灯明皿に転用されている。59は白磁割花文小皿。60は伊勢産の土鍋。61,62はかわらけ底部を円盤状に打ち欠いたもので、用途不明。63は土師器甕。混入遺物であろう。64は平瓦。65は軒丸瓦。66は漆器皿。無文。67は漆器椀。内面には漆が塗布されておらず、未製品であるかもしれない。68～96は木製品。68は不明。将棋の駒だろうか。69は舟形。刳り舟に舟梁・舷を木串で繋いでおり、舳先に１つ、艫にも３つの木串を挿し込む穿孔が認められる。70は卒塔婆と思われる。墨書は認められない。71～75は箸。76は鉤状を呈しているが、加工痕が明瞭でなく判然としない。77,78は曲物底板。79は衣紋掛けと思われるもの。80～82は板草履。83～95は用途不明。96は弓形。側面形は全体に緩く湾曲している。湾曲した内面側の、雅緩鞄殉から片方の弭にかけて、縦に長い亀甲状の形を呈する深さ１～２㎜、長さ約17.5㎝の樋が刻み込まれている。中央付近は約５㎝幅を断面円形に成形し、その両側を山状に削り残した突起としていることから、この部分が騏になるものと考えられる。

［遺構96］溝

Ⅱ区東端部で検出され、調査区を南北に貫く。覆土は基盤層に近似する黒褐色粘質土である。全体的に近代以降の削平を受けており特に東肩部は大きく失われ、現状では幅約150㎝を測るが、底面を境に左右対称の立ち上がりをもつものであったならば、220㎝前後の幅を有していたことが想定される。底面幅は40～60㎝を測り、遺構91に比較すると断面形は逆台形に近い。底面には10㎝程度の段差が２ヶ所認められ、いずれも段差の南側が低くなる。検出面からの深さは50～80㎝を測り、底面標高は北端で約10.2ｍ、南端で約9.9ｍで南に向かう流下方位を示す。流下方位はＮ－167°－Ｗを指す。

出土遺物は図23～25-1～52に示した。1～35はかわらけ。5～19、22～35は手づくね成形のもの。4,19はコースターと呼称する極小型かわらけ。35は底面中央に穿孔が認められる。36は青磁割花文碗。37は褐釉水注。舶載品と思われる。38～53は木製品。38は6㌢網の柄と思われるもの。先が二股に分かれた樹枝を利用したもので、枠の片側は欠失している。枠には穿孔などの加工痕は認められなかった。また、柄の表面には樹皮が残っている部分も見られた。39は曲物の底板。40～44は板草履。45は鋤先とも思われるが遺存状況悪く明らかでない。46は箸。47,48は用途不明。49,50は折敷。51～53は竹製品。51は用途不明。52,53は矢柄とも思われる管状

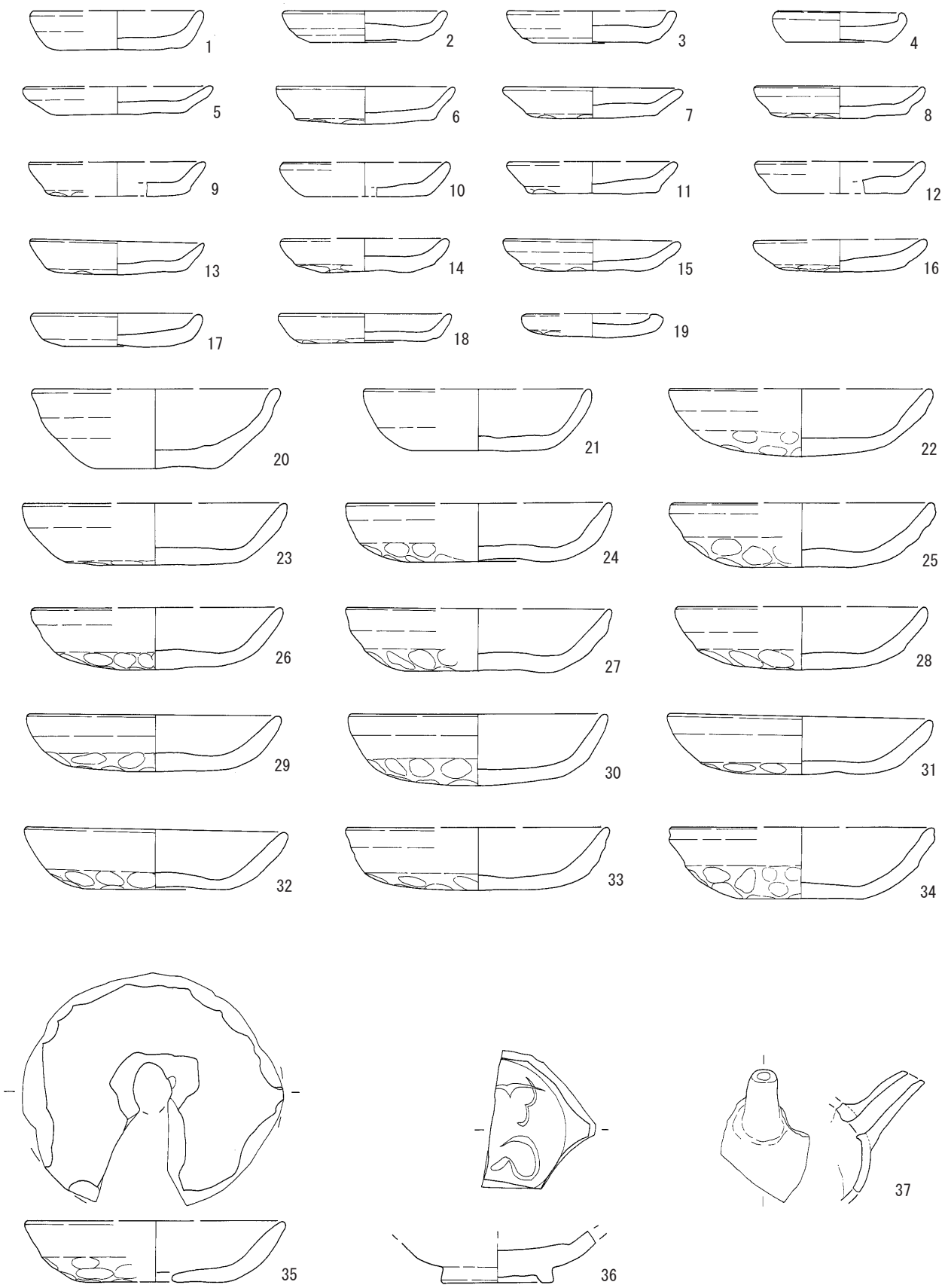


図２３　第４Ａ面遺構９６出土遺物（１）

のもの。

第４Ｂ面

第４Ａ面と同一面で中世を遡る時代の遺構群が検出され、これらを第４Ｂ面とした。上面で遺構プランを確定することが難しい遺構もあり、第４Ａ面から10 ㎝ほど掘り下げてすべての遺構を確認した。柱穴・土坑類のほか、Ⅱ区東端部で部分的にトレンチを設定して掘削したところ、溝状の落ち込みを検出することができた。

［遺構138］溝状落ち込み

Ⅱ区東端部にトレンチを設定して検出したものである。覆土は基盤層に近似する黒褐色粘質土であった。上部を削平により失い、肩部を遺構96 に壊されているものの、幅80 ㎝以上 × 検出面からの深さ約90 ㎝、底面標高約9.9 ｍを測る。検出された底面はごくわずかな範囲であり、さらに東へ落ち込むことも考えられる。溝あるいは古東御門川の西肩部となる可能性も考えなければならないだろう。

［遺構105-a、129、135］柱穴列１

Ⅱ区中央付近で３基の柱穴が直線的に並ぶ状況が検出された。各柱間はいずれも約160 ㎝を測り、主軸方位はＮ－１°－Ｗを指す。覆土はいずれの柱穴も基盤層に近似する黒褐色粘質土で、黄白色シルト粒や赤色スコリアに類似する微粒子を少量含む。各柱穴の規模は北から、直径約30 ㎝×深さ約40 ㎝、直径約30 ㎝×深さ約40 ㎝、直径約25 ㎝×深さ約40 ㎝を測り、底面標高は北から約10.3 ｍ、約10.35 ｍ、約10.2 ｍで比較的均一に揃っている。

［遺構105-b、128］柱穴列２

Ⅱ区中央付近で２基の柱穴が並ぶ状況が検出された。覆土はいずれも基盤層に近似する黒褐色粘質土で、黄白色シルト粒や赤色スコリアに類似する微粒子を少量含む。２基のみであるので建物の配列を為すものか判然としないものの、覆土や規模の類似から一連の遺構として捉えたものである。柱間は約170 ㎝を測り、主軸方位はＮ－15°－Ｅを指す。各柱穴の規模は北から、長径約45 ㎝×短径約35 ㎝×深さ約40 ㎝、長径約50 ㎝×短径約40 ㎝×深さ約30 ㎝で、底面標高は北から約10.4 ｍ、約10.5 ｍを測る。

出土遺物は図25-56に示した。56は土師器甕。

［遺構106］土坑

Ⅱ区中央付近で検出された。覆土は基盤層に近似する黒褐色

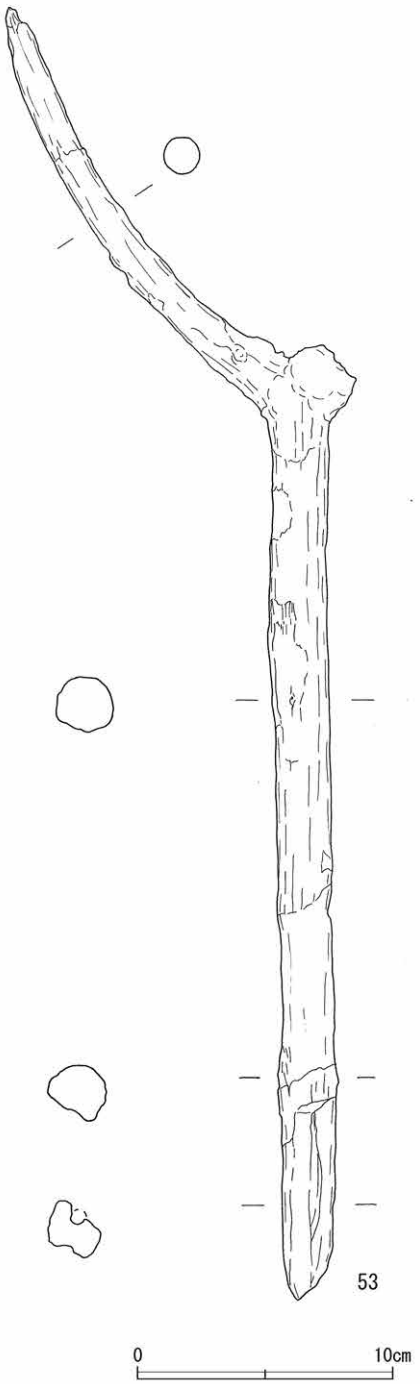


図２４　第４面遺構96
出土遺物（２）

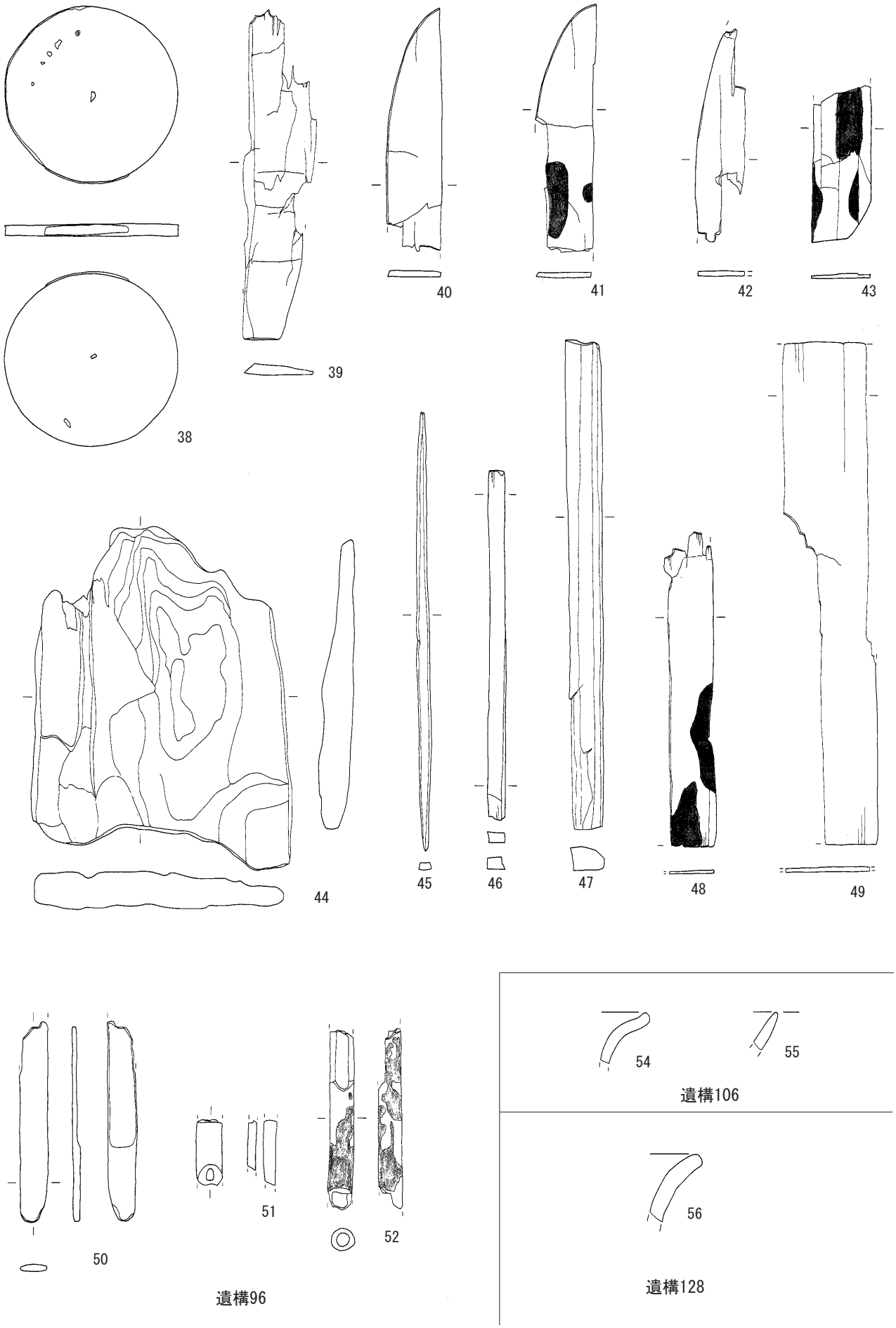


図２５　第４Ａ面遺構９６（３）、第４Ｂ面遺構１０６、１２８出土遺物

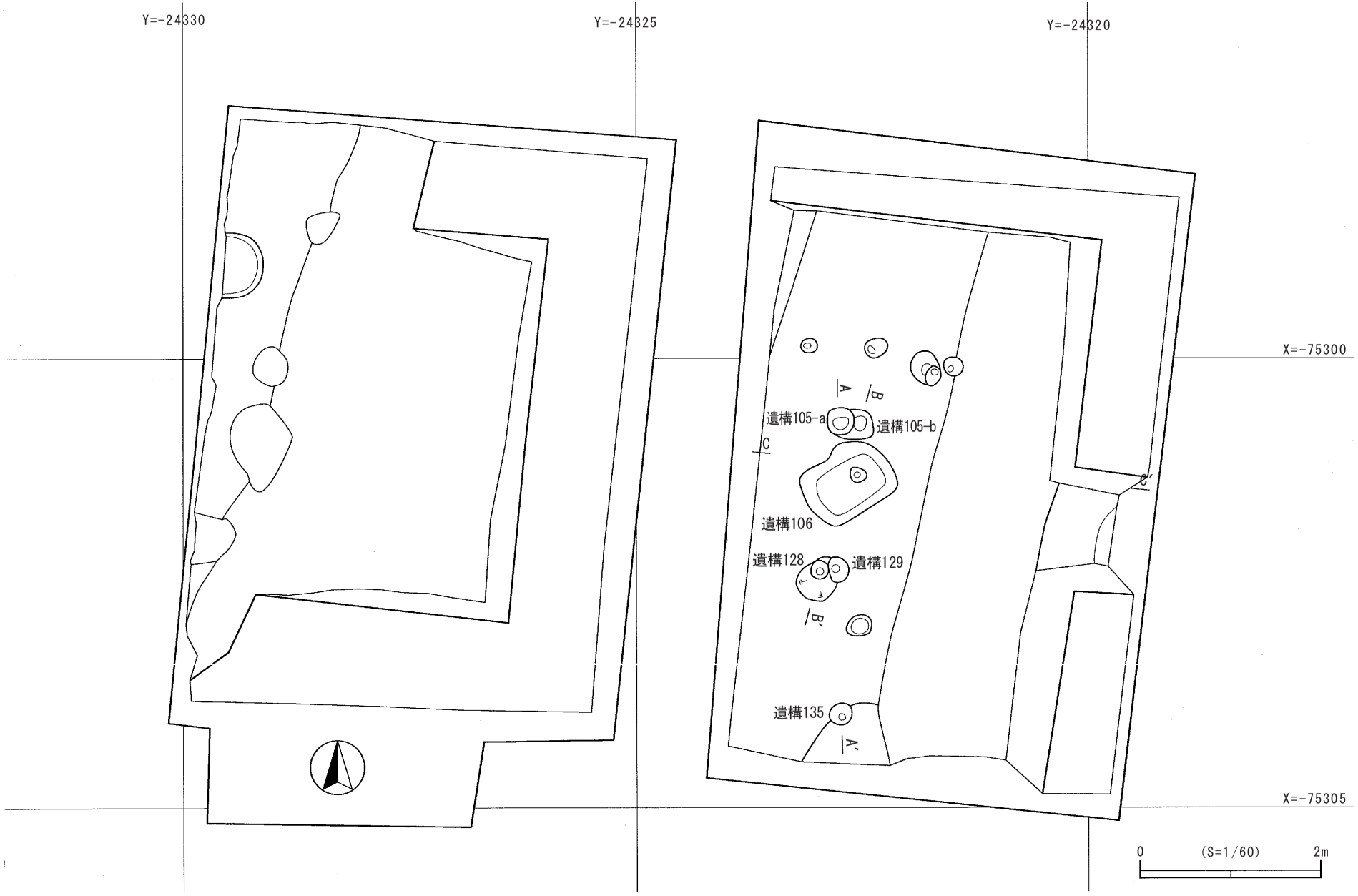

Y=-24330
Y=-24325
Y=-24320
X=-75300
X=-75305
遺構105-a
遺構105-b
遺構106
遺構128
遺構129
遺構135
A
A'
B
B'
C
C'
0
(S=1/60)
2m

図２６　第４Ｂ面全体図

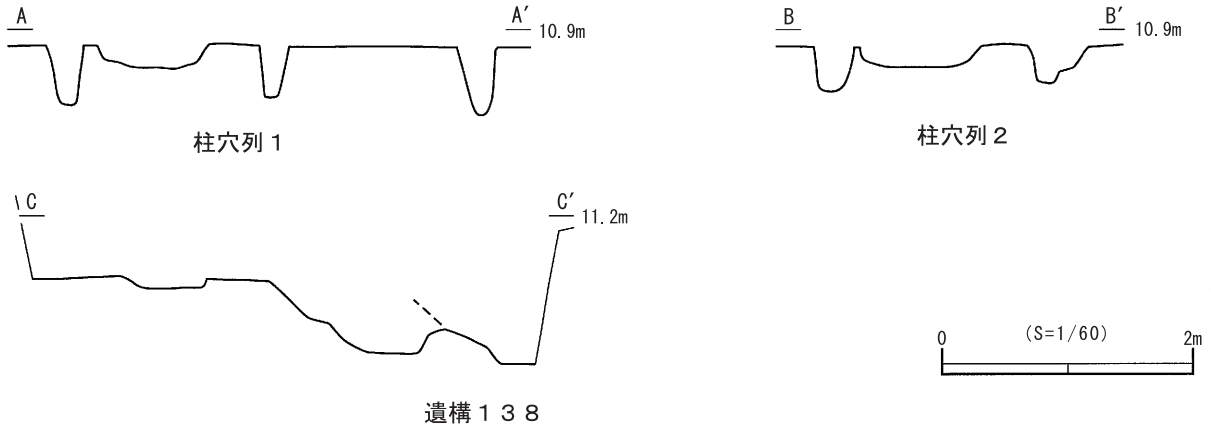


図２７　第４Ｂ面遺構断面図

粘質土で､黄白色シルト粒や赤色スコリアに類似する微粒子を少量含む。平面形は不整隅丸方形を呈し、規模は長軸約 100 ㎝×短軸約 80 ㎝、深さ約 20 ㎝、底面標高約 10.6 ｍを測る。主軸方位はＮ－ 57 ゜－Ｅを指す。

出土遺物は図25-54，55に示した。54は土師器甕。55は 土師器坏。外面には赤彩が施される。

図	No.	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第１面						
図4	1	土器　かわらけ	(8.4)	(6.8)	1.9	
図4	2	土器　かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.8	
図4	3	土器　かわらけ	(7.4)	4.2	2.0	
図4	4	土器　かわらけ	(8.4)	(7.4)	1.8	
図4	5	土器　かわらけ	8.7	—	2.2	手づくね
図4	6	土器　かわらけ	8.6	—	3.0	手づくね
図4	7	土器　かわらけ	(9.4)	—	2.2	手づくね
図4	8	土器　かわらけ	(10.2)	—	2.6	手づくね
図4	9	土器　かわらけ	9.5	—	2.1	手づくね
図4	10	土器　かわらけ	6.6	—	1.5	手づくね、コースター
図4	11	土器　かわらけ	11.8	7.4	3.0	
図4	12	土器　かわらけ	(12.8)	(7.4)	3.5	
図4	13	土器　かわらけ	13.6	—	3.1	手づくね、灯明皿
図4	14	土器　かわらけ	13.2	—	3.2	手づくね、灯明皿
図4	15	常滑　甕	—	—	[7.8]	
図4	16	常滑　甕	—	—	[5.4]	
図4	17	山茶碗窯　捏ね鉢	—	—	[4.3]	
図4	18	青磁　蓮弁文碗	—	—	[4.7]	
図4	19	土製品　瓦器碗	(12.8)	—	[2.8]	
図4	20	土製品　管状土錘	長さ[4.1]	幅1.7	厚さ[1.1]	
図4	21	石製品　砥石	長さ[5.6]	幅3.5	厚さ0.7	仕上砥
図4	22	銅製品　銭	直径2.4	—	—	□□通寶
図4	23	銅製品　銭	直径2.4	—	—	紹聖元寶
第２面　遺構１－b						
図８	1	土器　かわらけ	(9.0)	(6.0)	1.6	
図８	2	土器　かわらけ	8.6	5.6	1.8	
図８	3	土器　かわらけ	8.6	5.6	1.9	
図８	4	土器　かわらけ	(8.6)	—	1.9	手づくね
図８	5	土器　かわらけ	9.0	—	1.8	手づくね
図８	6	土器　かわらけ	9.0	—	2.9	手づくね
図８	7	土器　かわらけ	8.5	—	1.7	手づくね
図８	8	土器　かわらけ	9.2	—	2.0	手づくね
図８	9	土器　かわらけ	(12.4)	—	3.2	手づくね
図８	10	土器　かわらけ	(13.4)	—	4.0	手づくね
図８	11	土器　かわらけ	13.6	—	3.7	手づくね
図８	12	土器　かわらけ	14.0	—	3.7	手づくね
図８	13	土器　かわらけ	14.1	—	3.2	手づくね
図８	14	土器　須恵器坏	—	—	[3.5]	
図８	15	土丹加工品	長辺7.2	短辺6.9	厚さ3.2	直径1.5cmの穿孔有り
図８	16	木製品　曲物底板	直径12.0	—	厚さ0.7	
図８	17	木製品　曲物底板	直径15.5	—	厚さ0.9	漆？付着
図８	18	木製品　板草履	長さ[8.4]	幅[2.8]	厚さ0.3	
図８	19	木製品　不明	長さ6.2	幅0.9	厚さ0.6	漆？付着、木釘有り
図８	20	木製品　不明	長さ[16.0]	幅1.7	厚さ1.4	
第２面　遺構２						
図８	21	土器　かわらけ	8.6	6.4	1.6	
図８	22	土器　かわらけ	9.4	7.0	1.8	
図８	23	土器　かわらけ	8.4	6.0	1.8	
図８	24	土器　かわらけ	8.8	6.4	1.5	
図８	25	土器　かわらけ	9.0	—	2.0	手づくね
図８	26	土器　かわらけ	9.1	—	1.9	手づくね
図８	27	土器　かわらけ	9.1	—	2.0	手づくね
図８	28	土器　かわらけ	9.1	—	2.1	手づくね
図８	29	土器　かわらけ	9.1	—	1.6	手づくね
図８	30	土器　かわらけ	8.6	—	1.9	手づくね
図８	31	土器　かわらけ	8.8	—	1.4	手づくね
図８	32	土器　かわらけ	9.0	—	2.0	手づくね
図８	33	土器　かわらけ	(12.6)	(7.6)	3.1	
図８	34	土器　かわらけ	13.0	—	3.6	手づくね
図８	35	土器　かわらけ	(12.4)	—	2.8	手づくね
図	No.	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考

図	No.	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第２面　遺構２						
図８	36	土器　かわらけ	(13.2)	—	3.3	手づくね
図８	37	土器　かわらけ	(13.4)	—	3.7	手づくね
図８	38	土器　かわらけ	13.1	—	3.9	手づくね
第２面　遺構６						
図９	1	土器　かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.7	
図９	2	土器　かわらけ	(7.0)	(5.0)	1.4	
図９	3	土器　かわらけ	7.2	5.1	1.6	
図９	4	土器　かわらけ	7.2	5.5	1.5	
図９	5	土器　かわらけ	7.2	5.0	1.7	
図９	6	土器　かわらけ	(13.6)	(8.0)	3.5	
図９	7	土器　かわらけ	(12.6)	(7.0)	3.3	
図９	8	土器　かわらけ	13.2	6.6	3.6	
図９	9	土器　かわらけ	(13.0)	—	3.0	手づくね
図９	10	土器　かわらけ	(13.4)	—	3.6	手づくね
図９	11	土器　かわらけ	(13.6)	—	3.7	手づくね
図９	12	土器　かわらけ	13.2	—	3.7	手づくね
第２面　遺構７						
図９	13	土器　かわらけ	6.9	4.6	1.4	灯明皿
図９	14	土器　かわらけ	(9.8)	(7.4)	1.7	
図９	15	土器　かわらけ	(13.8)	—	3.4	手づくね
図９	16	土器　かわらけ	(13.8)	—	3.4	手づくね
図９	17	土器　かわらけ	(12.2)	—	3.8	手づくね
図９	18	常滑　壷	—	—	[5.2]	
図９	19	山茶碗窯　捏ね鉢	—	—	[4.7]	
図９	20	瀬戸　瓶子	(5.4)	—	[3.7]	
図９	21	青磁　蓮弁文碗	—	—	[4.0]	
図９	22	青白磁　合子蓋	—	—	[1.8]	
図９	23	銅製品　銭	直径2.4	—	—	元祐通寶
第２面　遺構３						
図９	24	土器　かわらけ	10.4	—	3.8	手づくね
第２面　遺構５						
図10	1	土器　かわらけ	8.1	6.0	1.8	
図10	2	土器　かわらけ	(8.0)	6.0	2.1	
図10	3	土器　かわらけ	8.6	6.6	1.8	
図10	4	土器　かわらけ	(9.2)	7.6	1.7	
図10	5	土器　かわらけ	8.6	6.8	2.0	
図10	6	土器　かわらけ	9.0	7.6	1.9	
図10	7	土器　かわらけ	9.1	7.7	2.1	
図10	8	土器　かわらけ	9.4	7.5	2.0	
図10	9	土器　かわらけ	9.7	7.4	1.8	
図10	10	土器　かわらけ	9.5	7.8	1.8	
図10	11	土器　かわらけ	(9.5)	7.0	2.0	
図10	12	土器　かわらけ	9.7	7.0	1.9	
図10	13	土器　かわらけ	9.3	7.3	1.7	
図10	14	土器　かわらけ	(9.6)	(7.7)	1.9	
図10	15	土器　かわらけ	9.1	7.3	1.8	
図10	16	土器　かわらけ	9.6	8.0	1.9	
図10	17	土器　かわらけ	9.4	7.5	2.0	
図10	18	土器　かわらけ	9.0	6.9	2.0	
図10	19	土器　かわらけ	(9.0)	(6.8)	2.0	
図10	20	土器　かわらけ	8.0	6.5	1.9	灯明皿
図10	21	土器　かわらけ	8.6	—	2.1	手づくね
図10	22	土器　かわらけ	9.6	—	1.9	手づくね
図10	23	土器　かわらけ	9.3	—	2.0	手づくね
図10	24	土器　かわらけ	9.5	—	2.3	手づくね
図10	25	土器　かわらけ	9.0	—	1.9	手づくね
図10	26	土器　かわらけ	8.5	—	1.7	手づくね
図10	27	土器　かわらけ	8.9	—	2.1	手づくね
図10	28	土器　かわらけ	9.0	—	2.1	手づくね
図10	29	土器　かわらけ	8.8	—	2.0	手づくね
図	No.	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考

表１　遺物法量表

第２面　遺構５						
図10	30	土器　かわらけ	9.6	—	1.8	手づくね
図10	31	土器　かわらけ	9.5	—	2.0	手づくね
図10	32	土器　かわらけ	10.1	—	2.4	手づくね
図10	33	土器　かわらけ	12.6	8.1	4.3	
図10	34	土器　かわらけ	12.2	9.6	3.0	
図10	35	土器　かわらけ	(13.8)	7.6	3.6	
図10	36	土器　かわらけ	(12.6)	—	3.1	手づくね
図10	37	土器　かわらけ	12.9	—	4.0	手づくね
図10	38	土器　かわらけ	13.1	—	3.1	手づくね
図10	39	土器　かわらけ	12.8	—	3.6	手づくね
図10	40	土器　かわらけ	13.3	—	3.6	手づくね
図10	41	土器　かわらけ	13.5	—	3.2	手づくね
図10	42	土器　かわらけ	13.8	—	3.7	手づくね
図10	43	土器　かわらけ	13.6	—	3.8	手づくね
図10	44	土器　かわらけ	13.3	—	3.6	手づくね
図10	45	土器　かわらけ	14.1	—	3.3	手づくね
図10	46	土器　かわらけ	13.1	—	3.5	手づくね
図10	47	土器　かわらけ	(13.5)	—	3.8	手づくね
図10	48	土器　かわらけ	(13.7)	—	4.0	手づくね
図10	49	土器　かわらけ	14.8	—	3.5	手づくね
図10	50	土器　かわらけ	14.2	—	3.4	手づくね
図10	51	土器　かわらけ	13.3	—	3.1	手づくね
図10	52	土器　かわらけ	13.1	—	3.6	手づくね
図10	53	土器　かわらけ	14.4	—	3.4	手づくね
図10	54	青白磁　合子蓋	(7.4)	—	[1.9]	
第２面　遺構外						
図11	1	土器　かわらけ	6.6	4.6	1.6	
図11	2	土器　かわらけ	(7.4)	5.6	1.7	
図11	3	土器　かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.5	
図11	4	土器　かわらけ	7.0	5.0	1.9	
図11	5	土器　かわらけ	(7.0)	4.6	1.7	
図11	6	土器　かわらけ	7.3	5.5	1.7	
図11	7	土器　かわらけ	6.9	4.8	1.7	
図11	8	土器　かわらけ	7.8	5.6	1.9	
図11	9	土器　かわらけ	7.8	6.0	1.9	
図11	10	土器　かわらけ	(6.2)	7.0	1.8	
図11	11	土器　かわらけ	8.6	—	2.0	手づくね
図11	12	土器　かわらけ	8.6	—	2.1	手づくね
図11	13	土器　かわらけ	9.5	—	2.0	手づくね
図11	14	土器　かわらけ	(10.8)	(6.6)	2.8	
図11	15	土器　かわらけ	(13.6)	(7.6)	3.5	
図11	16	土器　かわらけ	(12.6)	(7.2)	3.8	
図11	17	土器　かわらけ	(13.4)	—	[3.5]	手づくね
図11	18	土器　かわらけ	(13.6)	—	3.0	手づくね
図11	19	山茶碗窯　捏ね鉢	—	—	[6.7]	
図11	20	山茶碗窯　捏ね鉢	—	—	[5.4]	
図11	21	山茶碗窯　捏ね鉢	—	—	[5.9]	
図11	22	常滑　捏ね鉢	—	11.6	[5.1]	
図11	23	青磁　蓮弁文碗	—	—	[4.1]	
図11	24	青白磁　合子	(5.4)	(6.2)	1.8	
図11	25	土器　かわらけ	長辺7.7	短辺[5.2]	高さ[1.8]	底面穿孔
図11	26	土製品　瓦質手焙	(31.6)	(24.9)	12.3	
図11	27	瓦　丸瓦	長さ[12.3]	幅[9.6]	厚さ2.6	
図11	28	石製品　滑石鍋	—	—	[5.8]	
図11	29	石製品　碁石	長辺1.9	短辺1.8	厚さ0.3	
図11	30	石製品　砥石	長さ[5.0]	幅2.0	厚さ1.6	仕上砥
図11	31	銅製品　銭	直径2.4	—	—	□□通寶
第３面　遺構７－b						
図14	1	土器　かわらけ	(8.6)	(5.8)	2.0	
図14	2	土器　かわらけ	(8.8)	(7.0)	1.8	

第３面　遺構７－b						
図14	3	土器　かわらけ	9.2	5.2	2.3	
図14	4	土器　かわらけ	(9.6)	(7.2)	1.9	
図14	5	土器　かわらけ	9.0	6.0	2.0	
図14	6	土器　かわらけ	9.4	6.5	1.7	灯明皿
図14	7	土器　かわらけ	(9.4)	—	2.2	手づくね、灯明皿
図14	8	土器　かわらけ	12.2	—	3.3	手づくね
図14	9	土器　かわらけ	12.0	—	3.6	手づくね
図14	10	土器　かわらけ	12.3	—	3.7	手づくね
図14	11	土器　かわらけ	(13.6)	—	3.4	手づくね
図14	12	土器　かわらけ	(12.6)	—	[3.0]	手づくね
図14	13	土器　かわらけ	12.9	—	3.4	手づくね
図14	14	土器　かわらけ	13.2	—	3.6	手づくね
図14	15	土器　かわらけ	13.2	—	3.8	手づくね
図14	16	土器　かわらけ	13.8	—	3.0	手づくね
図14	17	土器　かわらけ	13.4	—	3.4	手づくね
図14	18	土器　かわらけ	13.6	—	3.2	手づくね
図14	19	土器　かわらけ	14.7	—	3.5	手づくね
第３面　遺構92						
図14	20	土器　かわらけ	12.6	7.9	3.9	
図14	21	土器　かわらけ	(13.4)	8.6	3.8	
図14	22	土器　かわらけ	(11.6)	(8.6)	3.5	
図14	23	土器　かわらけ	13.6	—	3.7	手づくね
図14	24	土器　かわらけ	13.6	—	3.5	手づくね
図14	25	土器　かわらけ	(13.6)	—	3.0	手づくね
第３面　遺構26						
図14	26	土器　かわらけ	9.4	7.1	2.4	
図14	27	土器　かわらけ	(13.2)	—	3.2	手づくね
図14	28	土器　白かわらけ	—	—	[1.2]	内折れ
第３面　遺構56・66						
図14	29	土器　かわらけ	13.2	—	3.2	手づくね
図14	30	常滑　甕	—	—	[9.1]	
第３面　遺構57						
図14	31	青磁　画花文小皿	—	—	[2.2]	
図14	32	青磁　画花文小皿	—	4.0	[1.7]	
図14	33	瓦　平瓦	長さ[14.2]	幅[10.0]	厚さ2.5	
第３面　遺構58						
図15	1	土器　かわらけ	(8.8)	(6.0)	1.6	
図15	2	土器　かわらけ	(8.8)	(6.8)	2.0	
図15	3	土器　かわらけ	9.6	—	2.0	手づくね
図15	4	瀬戸　四耳壺	—	—	[8.0]	
第３面　遺構67						
図15	5	土器　かわらけ	(8.2)	(6.6)	1.9	
図15	6	土器　かわらけ	(9.4)	(6.4)	2.0	
図15	7	土器　かわらけ	(13.6)	—	2.9	手づくね
第３面　遺構71						
図15	8	土器　かわらけ	(8.4)	(6.0)	2.0	
図15	9	土器　かわらけ	9.2	—	1.9	手づくね
図15	10	土器　かわらけ	(12.6)	—	[3.1]	手づくね
図15	11	土器　かわらけ	13.4	—	3.0	手づくね
第３面　遺構77						
図15	12	土器　かわらけ	(9.0)	(6.6)	1.7	
図15	13	土器　かわらけ	8.8	—	1.8	手づくね
図15	14	土器　かわらけ	(13.8)	—	3.6	手づくね
図15	15	土器　かわらけ	(13.8)	—	2.8	手づくね
図15	16	土器　かわらけ	13.4	—	3.6	手づくね、灯明皿
図15	17	土器　かわらけ	12.6	—	3.2	手づくね
第３面　遺構51						
図15	18	土器　かわらけ	8.4	7.0	2.0	
図15	19	石製品　砥石	長さ5.8	幅2.2	厚さ1.7	中砥

表２　遺物法量表

図	No.	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第３面　遺構90						
図15	20	土器　かわらけ	(9.0)	(6.6)	2.2	
図15	21	土器　かわらけ	(9.0)	(7.2)	2.1	
図15	22	土器　かわらけ	(9.6)	(7.2)	2.0	
図15	23	土器　かわらけ	(9.4)	(7.0)	1.8	
図15	24	土器　かわらけ	9.2	7.0	2.1	
図15	25	土器　かわらけ	(9.8)	(8.6)	2.1	
図15	26	土器　かわらけ	8.6	—	2.5	手づくね
図15	27	土器　かわらけ	(9.0)	—	1.9	手づくね
図15	28	土器　かわらけ	8.8	—	2.7	手づくね
図15	29	山茶碗窯　捏ね鉢	—	—	[5.0]	
第３面　遺構78						
図15	30	銅製品　銭	直径2.4	—	—	紹聖元寳
第３面　遺構55						
図15	31	土器　かわらけ	(9.6)	—	2.1	手づくね
第３面　遺構65						
図15	32	土器　かわらけ	(13.4)	—	3.8	手づくね
図15	33	土器　かわらけ	13.3	—	3.4	手づくね
第３面　遺構84						
図15	34	土器　かわらけ	9.1	—	2.1	手づくね
第３面　遺構外						
図16	1	土器　かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.5	
図16	2	土器　かわらけ	7.0	4.7	1.6	
図16	3	土器　かわらけ	7.5	5.5	1.5	
図16	4	土器　かわらけ	7.8	7.0	1.6	
図16	5	土器　かわらけ	(9.0)	(6.4)	2.1	
図16	6	土器　かわらけ	(8.8)	(6.2)	1.7	
図16	7	土器　かわらけ	(9.4)	(8.2)	1.8	
図16	8	土器　かわらけ	10.1	7.3	1.9	
図16	9	土器　かわらけ	8.5	—	2.0	手づくね
図16	10	土器　かわらけ	(9.2)	—	1.9	手づくね
図16	11	土器　かわらけ	(9.8)	—	1.9	手づくね
図16	12	土器　かわらけ	(9.4)	—	1.6	手づくね
図16	13	土器　かわらけ	(8.8)	—	2.0	手づくね
図16	14	土器　かわらけ	(9.6)	—	2.1	手づくね
図16	15	土器　かわらけ	(9.8)	—	2.1	手づくね
図16	16	土器　かわらけ	9.4	—	2.5	手づくね
図16	17	土器　かわらけ	(9.6)	—	2.0	手づくね
図16	18	土器　かわらけ	9.0	—	2.1	手づくね
図16	19	土器　かわらけ	(9.0)	—	2.2	手づくね
図16	20	土器　かわらけ	8.7	—	2.0	手づくね
図16	21	土器　かわらけ	8.4	—	2.0	手づくね
図16	22	土器　かわらけ	(9.2)	—	2.2	手づくね
図16	23	土器　かわらけ	(6.2)	—	1.4	手づくね、コースター
図16	24	土器　かわらけ	(13.4)	—	3.3	手づくね、灯明皿
図16	25	土器　かわらけ	13.4	—	3.2	手づくね
図16	26	土器　かわらけ	(13.6)	—	3.4	手づくね
図16	27	土器　かわらけ	13.2	—	3.4	手づくね
図16	28	土器　かわらけ	(13.4)	—	3.5	手づくね
図16	29	土器　かわらけ	(13.6)	—	3.4	手づくね
図16	30	土器　かわらけ	(13.2)	—	3.7	手づくね
図16	31	土器　かわらけ	(12.8)	—	3.7	手づくね
図16	32	土器　かわらけ	(13.6)	—	3.4	手づくね
図16	33	土器　かわらけ	(13.2)	—	3.6	手づくね
図16	34	土器　かわらけ	12.1	—	3.3	手づくね
図16	35	土器　かわらけ	(13.6)	—	2.9	手づくね
図16	36	土器　かわらけ	(12.8)	—	3.3	手づくね
図16	37	土器　かわらけ	(12.8)	—	3.7	手づくね
図16	38	土器　かわらけ	(13.6)	—	3.8	手づくね
図16	39	土器　かわらけ	(12.8)	—	[3.4]	手づくね
図16	40	土器　かわらけ	(13.8)	—	3.0	手づくね

図	No.	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第３面　遺構外						
図16	41	土器　かわらけ	(13.6)	—	2.8	手づくね
図16	42	常滑　甕	—	—	[10.5]	
図16	43	山茶碗窯　捏ね鉢	—	—	[7.3]	
図16	44	山茶碗窯　捏ね鉢	—	(12.6)	[9.3]	
図17	45	青磁　蓮弁文碗	—	—	[3.7]	
図17	46	青磁　折腰鉢	—	5.8	[2.0]	
図17	47	黄釉絞胎　壷	—	—	[7.7]	
図17	48	石製品　硯	長さ11.9	幅7.0	高さ2.2	
図17	49	鉄製品　鎌状製品	長さ[20.5]	幅2.2	厚さ0.9	
図17	50	鉄製品　鉄釘	長さ7.6	幅1.2	厚さ1.1	
第４Ａ面　遺構91						
図19	1	土器　かわらけ	(9.6)	5.4	1.8	
図19	2	土器　かわらけ	(9.2)	4.6	1.7	
図19	3	土器　かわらけ	(9.6)	(6.4)	1.7	
図19	4	土器　かわらけ	(9.0)	(4.6)	1.6	
図19	5	土器　かわらけ	(9.2)	(7.4)	1.8	
図19	6	土器　かわらけ	(9.2)	4.2	2.3	
図19	7	土器　かわらけ	(8.6)	5.0	1.9	
図19	8	土器　かわらけ	(9.6)	(5.6)	1.7	
図19	9	土器　かわらけ	(8.8)	(5.6)	1.6	
図19	10	土器　かわらけ	(8.6)	(5.6)	1.8	
図19	11	土器　かわらけ	(9.6)	6.0	2.1	
図19	12	土器　かわらけ	(9.0)	(5.0)	1.6	
図19	13	土器　かわらけ	(9.0)	(7.0)	2.0	
図19	14	土器　かわらけ	(9.2)	4.0	1.8	
図19	15	土器　かわらけ	9.2	4.4	1.7	
図19	16	土器　かわらけ	8.3	6.0	1.6	
図19	17	土器　かわらけ	(9.2)	4.6	2.1	
図19	18	土器　かわらけ	(8.8)	5.0	2.0	
図19	19	土器　かわらけ	(8.4)	—	1.6	手づくね
図19	20	土器　かわらけ	(8.6)	—	1.8	手づくね
図19	21	土器　かわらけ	(9.6)	—	1.8	手づくね
図19	22	土器　かわらけ	(8.8)	—	2.0	手づくね
図19	23	土器　かわらけ	(9.0)	—	1.4	手づくね
図19	24	土器　かわらけ	(9.0)	—	1.5	手づくね
図19	25	土器　かわらけ	(9.0)	—	1.8	手づくね
図19	26	土器　かわらけ	(9.0)	—	1.7	手づくね
図19	27	土器　かわらけ	(9.0)	—	1.4	手づくね
図19	28	土器　かわらけ	8.8	—	1.7	手づくね
図19	29	土器　かわらけ	(9.4)	—	1.9	手づくね
図19	30	土器　かわらけ	(9.4)	—	1.9	手づくね
図19	31	土器　かわらけ	9.3	—	1.9	手づくね
図19	32	土器　かわらけ	(9.6)	—	1.7	手づくね
図19	33	土器　かわらけ	9.0	—	1.3	手づくね
図19	34	土器　かわらけ	(10.0)	—	1.6	手づくね
図19	35	土器　かわらけ	9.2	—	2.1	手づくね
図19	36	土器　かわらけ	9.4	—	2.0	手づくね
図19	37	土器　かわらけ	9.4	—	1.7	手づくね
図19	38	土器　かわらけ	9.4	—	1.9	手づくね
図19	39	土器　かわらけ	9.2	—	1.8	手づくね
図19	40	土器　かわらけ	(9.6)	—	1.2	手づくね
図19	41	土器　かわらけ	(9.0)	—	2.1	手づくね
図19	42	土器　かわらけ	(8.6)	—	1.4	手づくね
図19	43	土器　かわらけ	(8.6)	—	1.9	手づくね
図19	44	土器　かわらけ	(6.4)	—	1.2	手づくね、コースター
図19	45	土器　かわらけ	(13.6)	(8.0)	3.1	手づくね
図19	46	土器　かわらけ	(13.4)	(7.6)	3.1	手づくね
図19	47	土器　かわらけ	13.4	—	2.9	手づくね
図19	48	土器　かわらけ	12.4	—	3.4	手づくね、灯明皿
図19	49	土器　かわらけ	(13.6)	—	2.8	手づくね

表３　遺物法量表

図	No.	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第４Ａ面　遺構91						
図19	50	土器　かわらけ	11.8	—	3.0	手づくね
図19	51	土器　かわらけ	13.8	—	3.5	手づくね、灯明皿
図19	52	土器　かわらけ	(14.0)	—	3.5	手づくね
図19	53	土器　かわらけ	(14.4)	—	3.3	手づくね
図19	54	土器　かわらけ	13.4	—	2.8	手づくね
図19	55	土器　かわらけ	13.8	—	3.3	手づくね
図19	56	土器　かわらけ	13.8	—	3.2	手づくね
図19	57	土器　かわらけ	(13.0)	—	4.6	手づくね
図19	58	土器　かわらけ	13.6	—	3.7	手づくね
図20	59	白磁　劃花文小皿	—	(4.0)	[1.5]	
図20	60	土製品　伊勢土鍋	—	—	[2.2]	
図20	61	土製品　円盤	長辺4.9	短辺4.8	厚さ0.8	かわらけ打ち欠き
図20	62	土製品　円盤	長辺3.5	短辺3.3	厚さ0.8	かわらけ打ち欠き
図20	63	土器　土師器甕	(15.5)	—	[6.9]	
図20	64	瓦　平瓦	長さ[10.2]	幅[6.5]	厚さ2.0	
図20	65	瓦　軒丸瓦	長さ[7.1]	幅[5.2]	厚さ3.2	
図20	66	漆器　皿	(9.8)	7.6	1.5	
図20	67	漆器　椀	(15.6)	9.0	4.6	
図20	68	木製品　不明	長さ2.0	幅1.9	厚さ0.7	
図20	69	木製品　舟形				
図20	70	木製品　卒塔婆	長さ33.2	幅3.0	厚さ0.3	
図20	71	木製品　箸	長さ26.9	幅0.8	厚さ0.35	
図20	72	木製品　箸	長さ26.9	幅0.6	厚さ0.4	
図20	73	木製品　箸	長さ26.3	幅0.8	厚さ0.5	
図20	74	木製品　箸	長さ24.9	幅0.9	厚さ0.35	
図20	75	木製品　箸	長さ23.0	幅0.7	厚さ0.4	
図20	76	木製品　鉤？	長さ[17.1]	幅[5.2]	直径0.8	
図20	77	木製品　曲物底板	長さ24.4	幅[4.7]	厚さ0.4	
図20	78	木製品　曲物底板	長さ23.2	幅[3.1]	厚さ0.35	
図21	79	木製品　衣紋掛け	長さ46.8	—	直径0.6	
図21	80	木製品　板草履	長さ23.1	幅[3.4]	厚さ0.3	
図21	81	木製品　板草履	長さ24.0	幅[2.8]	厚さ0.15	
図21	82	木製品　板草履	長さ23.7	幅[3.1]	厚さ0.35	
図21	83	木製品　不明	長さ22.6	幅1.1	厚さ0.6	
図21	84	木製品　不明	長さ[18.1]	幅[1.9]	厚さ0.4	
図21	85	木製品　不明	長さ34.1	幅2.4	厚さ1.7	
図21	86	木製品　不明	長さ44.8	幅2.0	厚さ1.7	
図21	87	木製品　不明	長さ[20.6]	幅[1.6]	厚さ0.75	
図21	88	木製品　不明	長さ[23.8]	幅1.4	厚さ0.6	
図21	89	木製品　不明	長さ14.4	幅2.2	厚さ0.6	
図21	90	木製品　不明	長さ13.4	幅2.0	厚さ1.0	
図21	91	木製品　不明	長さ13.9	幅6.7	厚さ0.7	
図21	92	木製品　不明	長さ13.4	幅1.7	厚さ1.0	先端焦げ痕有り
図21	93	木製品　不明	長さ7.6	幅5.8	厚さ2.5	
図21	94	木製品　不明	長さ10.5	幅3.9	厚さ2.0	
図21	95	木製品　不明	長さ10.6	幅6.6	厚さ1.7	
図22	96	木製品　弓形	長さ87.7	太さ径1.6	—	
第４Ａ面　遺構96						
図23	1	土器　かわらけ	(8.8)	(7.0)	2.1	
図23	2	土器　かわらけ	8.4	6.0	1.7	
図23	3	土器　かわらけ	(8.4)	(6.0)	1.7	
図23	4	土器　かわらけ	6.4	5.4	1.7	コースター
図23	5	土器　かわらけ	(9.8)	—	1.5	手づくね
図23	6	土器　かわらけ	9.2	—	2.0	手づくね
図23	7	土器　かわらけ	9.1	—	1.7	手づくね
図23	8	土器　かわらけ	8.8	—	1.7	手づくね
図23	9	土器　かわらけ	(9.0)	—	1.8	手づくね
図23	10	土器　かわらけ	(8.4)	—	1.8	手づくね
図23	11	土器　かわらけ	(8.6)	—	1.7	手づくね
図23	12	土器　かわらけ	(8.4)	—	1.7	手づくね

図	No.	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第４Ａ面　遺構96						
図23	13	土器　かわらけ	9.0	—	1.9	手づくね
図23	14	土器　かわらけ	(8.4)	—	1.8	手づくね
図23	15	土器　かわらけ	9.0	—	1.8	手づくね
図23	16	土器　かわらけ	(8.8)	—	1.7	手づくね
図23	17	土器　かわらけ	8.6	—	1.8	手づくね
図23	18	土器　かわらけ	8.8	—	1.6	手づくね
図23	19	土器　かわらけ	(6.0)	—	1.7	手づくね、コースター
図23	20	土器　かわらけ	(12.6)	(6.6)	4.2	
図23	21	土器　かわらけ	(11.6)	(7.0)	3.3	
図23	22	土器　かわらけ	(13.4)	—	3.6	手づくね
図23	23	土器　かわらけ	(13.6)	—	2.3	手づくね
図23	24	土器　かわらけ	(13.6)	—	3.1	手づくね
図23	25	土器　かわらけ	(13.6)	—	3.4	手づくね
図23	26	土器　かわらけ	(13.0)	—	3.3	手づくね
図23	27	土器　かわらけ	(13.6)	—	3.3	手づくね
図23	28	土器　かわらけ	(12.8)	—	3.4	手づくね
図23	29	土器　かわらけ	13.2	—	3.1	手づくね
図23	30	土器　かわらけ	13.4	—	3.8	手づくね
図23	31	土器　かわらけ	13.6	—	3.2	手づくね
図23	32	土器　かわらけ	13.6	—	3.3	手づくね
図23	33	土器　かわらけ	(13.6)	—	3.4	手づくね
図23	34	土器　かわらけ	(13.7)	—	3.9	手づくね
図23	35	土器　かわらけ	(13.2)	—	3.3	手づくね、底面穿孔
図23	36	青磁　劃花文碗	—	5.8	[2.7]	
図23	37	舶載　褐釉水注	—	—	[7.0]	
図25	38	木製品　曲物底板	直径9.8	—	厚さ0.7	
図25	39	木製品　板草履	長さ[18.7]	幅[3.9]	厚さ0.6	
図25	40	木製品　板草履	長さ[13.7]	幅[3.0]	厚さ0.35	
図25	41	木製品　板草履	長さ[14.1]	幅[3.1]	厚さ0.3	焦げ痕有り
図25	42	木製品　板草履	長さ[12.1]	幅[2.6]	厚さ0.3	
図25	43	木製品　板草履	長さ[8.9]	幅[3.3]	厚さ0.25	焦げ痕有り
図25	44	木製品　鋤先？	長さ[17.0]	幅14.7	厚さ1.8	
図25	45	木製品　箸	長さ24.7	幅0.7	厚さ0.4	
図25	46	木製品　不明	長さ19.8	幅1.0	厚さ0.7	
図25	47	木製品　不明	長さ27.6	幅1.9	厚さ1.4	
図25	48	木製品　折敷	長さ[17.8]	幅[2.5]	厚さ0.15	焦げ痕有り
図25	49	木製品　折敷	長さ28.4	幅[4.8]	厚さ0.25	
図25	50	木製品　不明	長さ[11.3]	幅1.6	厚さ0.9	
図25	51	木製品　不明	長さ[3.6]	—	直径1.6	矢柄？
図25	52	木製品　不明	長さ[10.1]	—	直径1.3	矢柄？
図24	53	木製品　たも	長さ52.5	2.3	2.2	
第４Ｂ面遺構106						
図25	54	土器　土師器甕	—	—	[2.9]	
図25	55	土器　土師器坏	—	—	[2.1]	
第４Ｂ面遺構128						
図25	56	土器　土師器甕	—	—	[3.8]	

表４　遺物法量表

第４章　まとめ

本調査では、東半部が近代以降の削平によって大きく失われていたことは非常に残念であったが、それでも得られた成果は大きい。ここでは年代を追って各面ごとに補足を加え、まとめとしたい。なお、文中の地点名表記は図１の地点番号を用いた。

［第４Ｂ面］

検出遺構は遺物の出土量が少なく、すべての遺構が同時期のものといえるか判然としない。出土遺物は多くが弥生中期後半～古墳前期に収まる年代のものと思われ、地点 18,19 などで同時代の集落跡が検出されていることを考えると、本遺跡も同一集落の一部であることが考えられる。調査地点の東を流れる東御門川は、少なくとも弥生時代にはほぼ同じ場所を流れていたことが地点 11 や地点 2 で確認されており、古東御門川が本調査地点や地点 18,19 を含む集落の東限であったことを思わせる。

［第４Ａ面］

検出された薬研堀は幅約 5.1 ｍ、深さ約 2.7 ｍという大規模なもので、出土遺物からは 13 世紀中頃までに埋没したものと考えられる。覆土はいくつかに分層できるものの各層は厚く、自然に埋没するに任せたものでなく人為的に埋め立てたことが推測される。東御門川からあまり間隔を空けずに開鑿されているが、その方位は河川に沿ったものではなく、対岸に鎮座する荏柄天神社の参道に対して平行に近い方位を示す。荏柄天神社はその社伝によると、長治元年（1104）に里人によって建てられたのが始まりとされ、頼朝が御所をここに構えたときには鬼門の守護神として崇め、改めて社殿を建てたという。社伝をそのまま信用するならば、薬研堀が荏柄天神社参道を意識した方位で設計された可能性も考え得る。この薬研堀を幕府東限の境界施設と考えると、嘉禄元年（1225）の御所移転後にその機能を失い、大倉辻が商業地域として指定される建長三年（1251）頃までには埋め立てられた、として出土遺物に年代的な齟齬はないように思う。薬研堀の東側に近接して断面逆台形の遺構 96 も検出されているが、こちらは薬研堀とは軸方位が異なり、むしろ東御門川に平行して開鑿されている。出土遺物からは薬研堀との明確な時期差が認められず、同時期に機能していた可能性がある。ただし、遺構 96 が河川に沿うもので薬研堀とは異なる方位を示すことから考えると、こちらは幕府にのみ適用される施設ではなかったのかもしれない。

薬研堀と遺構 96 が同時期に存在していたとすれば、それぞれの溝を直線的に延長すると調査区北端より約 12 ｍ北のところで両溝は交差することになる。また、両溝が時期の異なるものだとしても、薬研堀は調査区北端より 25 ～ 30 ｍほど北のところで東御門川と交差することになる。薬研堀の覆土には河川堆積に特徴的な砂礫層や斜交葉理などは確認されず、河川と接続していたとは考えにくいので、薬研堀は河川に接続する手前で止まってしまうか、あるいは方位を変えて延長することが推測される。延長するものであった場合、やや西へ振れて川沿いに北へ延びることも考えられるが、河川に接続するよりやや手前､清泉小学校南辺の道路沿い辺りで西に折れて延びる可能性も考えておきたい。ちなみに、この通称「桜道」と呼ばれる道路下には暗渠となっている流路があり、かつては「堀川」と呼ばれる河川であったらしい。大倉幕府推定域の北限となっている道路下にも「溝川」と呼ばれる流路が存在したらしいが、こちらは明治 42 ～ 43 年（1909 ～ 10）頃に開鑿されたもので、「堀川」はそれよりも古くから流れていたという（註１）。これが幕府の北限を示す可能性も視野に入れておきたいが、明治以前から存在していたことは知れるものの、中世に存在していたかどうかは現在のところ判らない。

大倉幕府東西域は県遺跡台帳に登録されている大倉幕府域より西へ延びる可能性が以前より様々な研究者によって指摘されている。師範学校が出来る以前には筋替橋から横浜国大附属小学校校庭入口に向かって北に延びる道があり、その道路が西の境界を示すという。これを裏付けるように、地点 7 では

幕府西限を示すような遺構は検出されず、地点10で南北柱穴列や東西溝など西限・南限を示すような遺構群が検出されている。ただ、この範囲を含めた幕府推定域は72,450㎡となるが、これは後の「宇津宮辻子幕府」や「若宮大路幕府」に比べて広大に過ぎるのではないかという指摘がある（註２）。「宇津宮辻子幕府」と「若宮大路幕府」に推定される範囲を合わせて、東を小町大路、西を若宮大路、北を横大路、南を雪ノ下カトリック教会の南辺とした場合、その面積はおよそ72,200㎡となり、二つの幕府域を併せてようやく大倉幕府推定域に匹敵する。大倉幕府域東限を本調査地点、西限・南限を地点10とすると、境界が確認されていないのは北限ということになるが、試みに大倉幕府域北限を清泉小学校南辺の道路と仮定して面積を再計算すると、およそ37,000㎡を測る。これは「宇津宮辻子幕府」・「若宮大路幕府」合算面積のほぼ半分に近い数値となり、単純に面積の比較でいうと妥当な数値とも思えるが、大倉幕府域については今後の資料蓄積を待たねば確かなことを言えないのが現状である。

［第３面］

本面での出土遺物は13世紀中頃～後半に比定されるもので、第４Ａ面で検出された薬研堀を覆う範囲まで地業面が広がっており、薬研堀は完全に埋没している。この時期の周辺は商業地域的な性格が色濃くなってくるものの、本調査地点では礎石や、四寸角ほどの柱が遺存する柱穴などが検出され、出土遺物に関しても絞胎陶片など類例の少ないものもあり、町屋的な様相とは思われない。ローム土を用いた地業面もあまり見かけることのないもので、特異な印象を受ける。『吾妻鏡』では宝治元年（1247）正月十三日条に、法華堂前の人家10軒が焼け、金沢実時（「陸奥掃部助」）亭もその中に入っていたとする。一帯が民家と武家屋敷の混在する状況にあったと考えられ、本調査地点では礎石や柱穴の配列は定かでないものの、どちらかといえば武家屋敷的な様相と捉えておきたい。

［第２面］

本面では溝のほか、土坑、窪地から集中的にかわらけが出土しているが、全体的に遺構の密度は薄い。出土遺物に薄手造りのかわらけが含まれ始めてくることから13世紀後半頃と考えられるが、手づくねかわらけも相当量出土しており、第３面から第２面にかけての年代幅はそれほど広くないのかもしれない。検出された南北溝は、その南延長が地点２検出の南北溝に重なる位置となる。ただし、出土遺物の年代観は必ずしも一致せず、地点２では戦国期まで存続するようである。

［第１面］

検出された遺構はすべて近代以降のものである。近世以降の耕作による削平を受けており、このため14世紀代以降の様相については明らかでないものの、14世紀代に比定される遺物も出土しており、第２面以降も濃密な生活空間が展開していたことは想像に難くない。

（註１）鎌倉市教育委員会編『鎌倉市文化財資料第７集　としよりのはなし』第五刷1990年（初版1971年）　鎌倉市教育委員会

（註２）馬淵和雄「大倉幕府跡（No.253）」『鎌倉市緊急調査報告書21　第１分冊』2005年　鎌倉市教育委員会

出土遺物構成（点数）

分類	かわらけ		白かわらけ	青磁			白磁			青白磁			彩釉	常滑		
出土面	コースター	加工品		碗皿類	壷瓶類	不明他	碗皿類	壷瓶類	不明他	碗皿類	壷瓶類	不明他		片口鉢	壷甕類	転用品
1面	1	—	—	17	—	1	4	1	—	—	1	1	—	5	114	—
2面	2	1	6	34	—	6	13	—	1	4	1	2	1	7	268	—
3面	2	—	10	14	—	—	4	6	—	1	—	3	4	1	139	—
4A面	4	2	5	11	—	—	2	1	—	2	1	—	3	2	98	1
4B面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	9	3	21	76	—	7	23	8	1	7	3	6	8	15	619	1

分類	瀬戸				渥美	魚住・亀山	山茶碗窯		土製火鉢		その他	瓦		金属製品		
出土面	碗皿類	鉢類	小型品	壷瓶類			碗皿類	片口鉢	土師質	瓦質	土製品	平瓦	丸瓦	釘	銭	不明他
1面	1	1	—	6	—	1	—	4	—	2	1	—	—	1	1	—
2面	3	10	1	1	1	2	3	19	11	1	—	10	1	12	2	—
3面	—	4	2	9	1	4	5	5	2	1	1	4	—	11	3	2
4A面	—	1	1	2	—	—	5	2	4	—	3	6	4	1	—	5
4B面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	4	16	4	18	2	7	13	30	17	4	5	20	5	25	6	7

分類	石製品			木製品								自然遺物			弥生～古代	合計
出土面	硯	砥石	不明他	椀皿	食膳具	容器	装身具	職労具	調度材	呪術具	不明他	鳥獣魚	貝	種子		
1面	—	2	—	—	—	2	—	—	—	—	1	2	—	—	3	173
2面	1	1	3	—	3	—	—	—	—	—	16	1	—	1	5	454
3面	1	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	—	20	266
4A面	—	—	3	4	13	2	9	1	1	3	29	9	3	—	30	273
4B面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	43	43
合計	2	3	8	4	16	4	9	1	1	3	46	17	3	1	101	1209

出土かわらけ構成（重量） ※単位はg（グラム）

分類 出土面	B大	B中	B小	C大	C中	C小	D大	D小	E大	E小	合計
1面	1,630	—	530	270	—	—	3,850	130	50	120	6,580
2面	3,725	—	4,080	940	20	20	60,940	7,890	900	350	78,865
3面	1,780	—	1,720	—	—	—	68,200	6,145	870	610	79,325
4A面	440	—	90	—	—	—	35,350	6,580	2,740	1,910	47,110
合計	7,575	—	6,420	1,210	20	20	168,340	20,745	4,560	2,990	211,880

※かわらけ分類について
先頭のアルファベットは成形・器形を示し、Aを胎土粉質で口縁部外反するロクロ糸切り成形、Cを焼成良好な薄手造りのロクロ糸切り成形、Bをそれ以外のロクロ糸切り成形、Dを手づくね成形、Eを初期かわらけに見られるロクロ低回転糸切り・静止糸切り成形で器表面をナデ調整しないタイプとした。
後部の漢字は器種を示し、大皿を大、中皿を中、小皿を小とした。コースターは器壁の極端に低い極小型かわらけを示す。
※Aタイプは出土しておらず、また、コースターは個体数が明確なため項目を除いた。第4B面はかわらけが出土していないため項目を除いた。

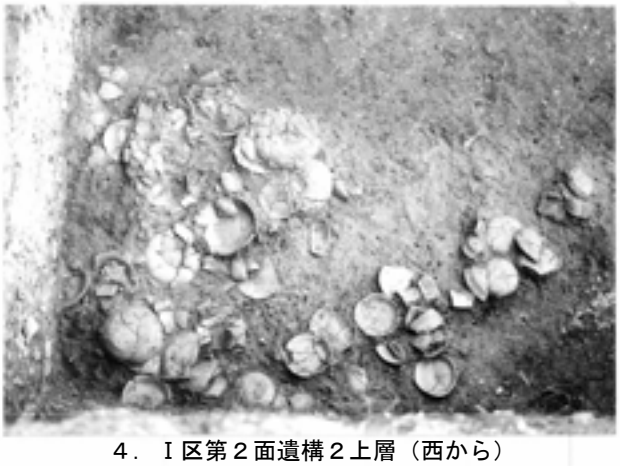
表５　遺物構成表

図版1

1．Ⅰ区第１面全景（南から）

2．Ⅰ区第２面全景（東から）

3．Ⅰ区第２面遺構２・３・５（西から）



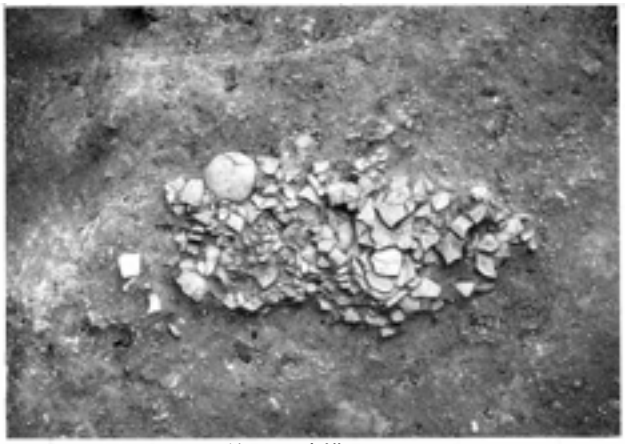
4．Ⅰ区第２面遺構２上層（西から）

5．Ⅰ区第２面遺構２下層（西から）

6．Ⅰ区第２面遺構２かわらけ重なり状況（北東から）

7．Ⅰ区第２面遺構５・６（西から）

8．Ⅰ区第２面遺構７（西から）



1．Ⅰ区第２面遺構３（北から）

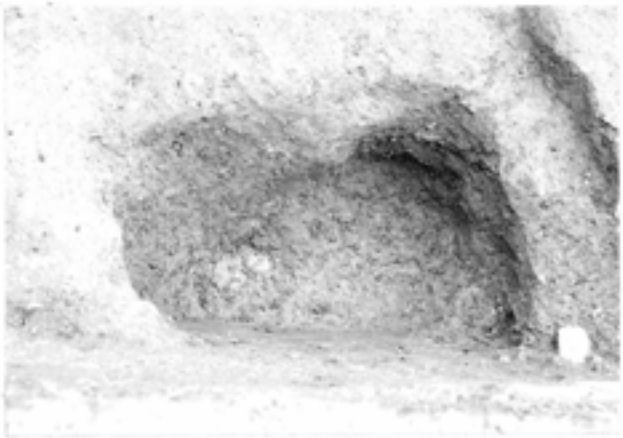
2．Ⅰ区第２面遺構５上層（西から）

3．Ⅰ区第２面遺構５上層かわらけ重なり状況（東から）

4．Ⅰ区第２面遺構５中層（西から）

5．Ⅰ区第２面遺構５下層（西から）

6．Ⅰ区第２面遺構５下層かわらけ重なり状況（東から）



7．Ⅰ区第２面遺構５掘り方（西から）

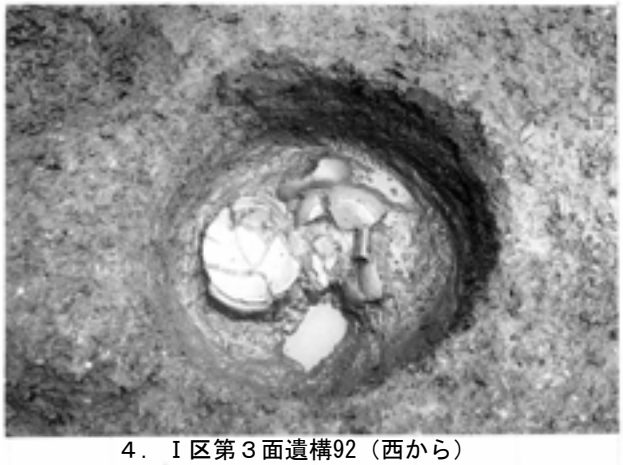
8．Ⅰ区第３面全景（南から）

図版3

1．Ⅰ区第３面礎石列（北から）

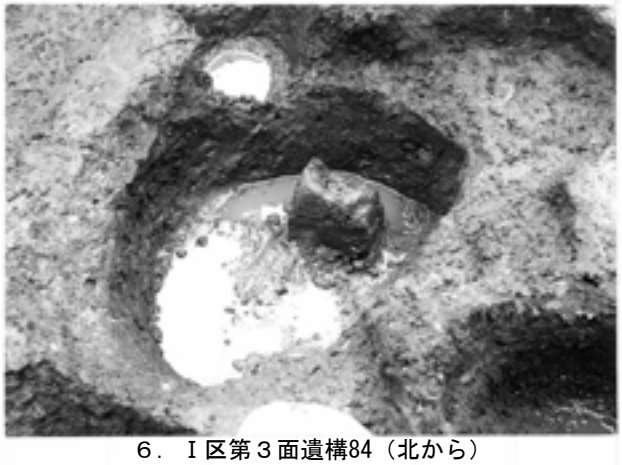
2．Ⅰ区第３面遺構７－ｂ（西から）

3．Ⅰ区第３面遺構７－ｂかわらけ出土状況（北から）



4．Ⅰ区第３面遺構92（西から）

5．Ⅰ区第３面遺構56（西から）



6．Ⅰ区第３面遺構84（北から）

7．Ⅰ区第３面調査風景（南東から）

8．Ⅰ区第４Ａ面全景（南から）

1．Ⅰ区調査区北壁堆積土層

2．Ⅰ区第４Ａ面遺構91弓形出土状況（南西から）

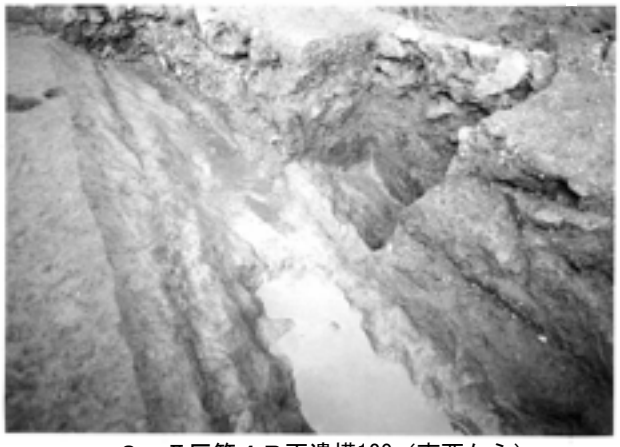
3．Ⅱ区第４Ａ面全景（南から）

4．Ⅱ区第４Ａ面遺構96かわらけ出土状況（北から）

5．Ⅱ区調査区北壁堆積土層

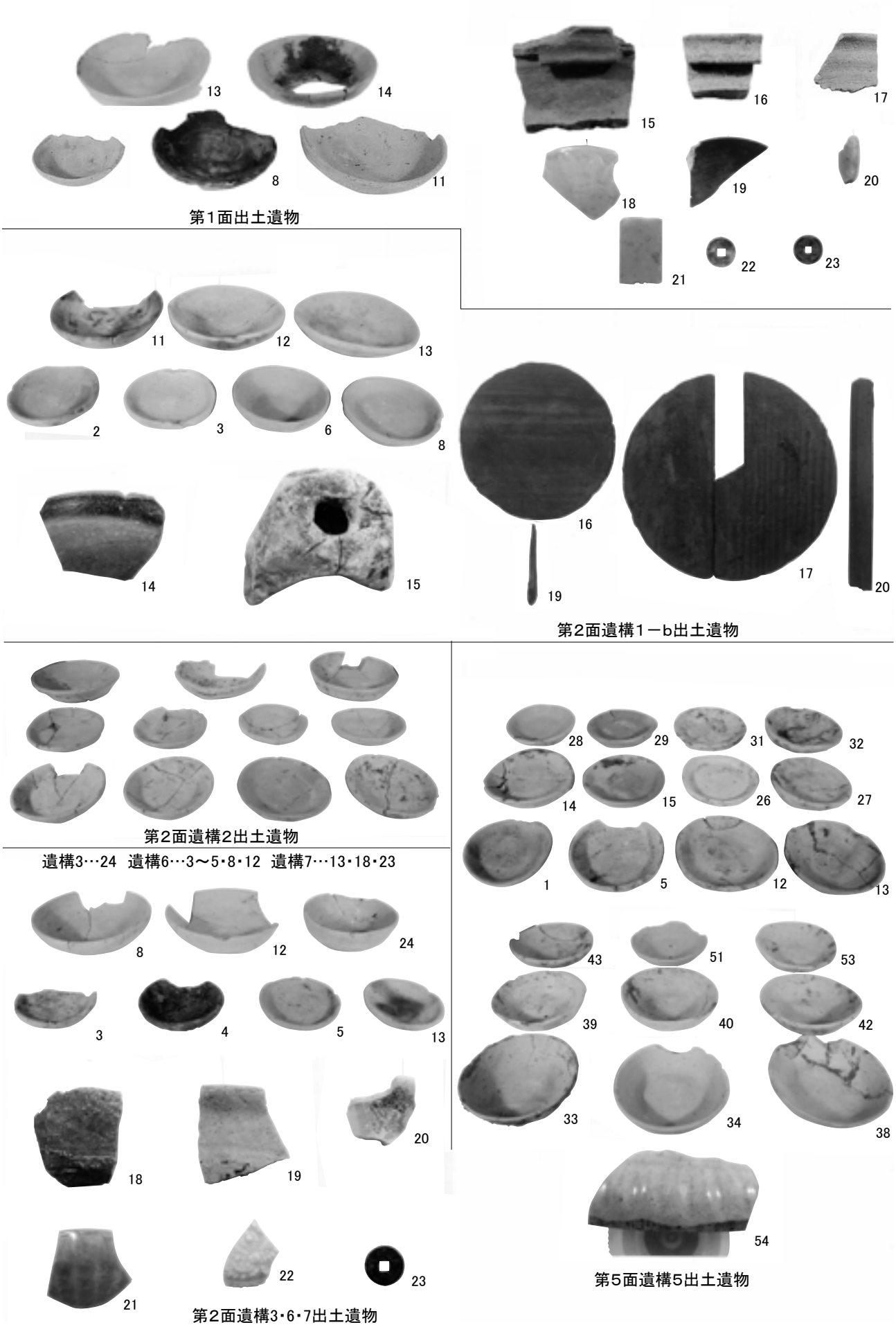
6．Ⅰ区第４Ｂ面全景（北から）

7．Ⅱ区第４Ｂ面全景（南から）



8．Ⅱ区第４Ｂ面遺構138（南西から）

図版5



第1面出土遺物

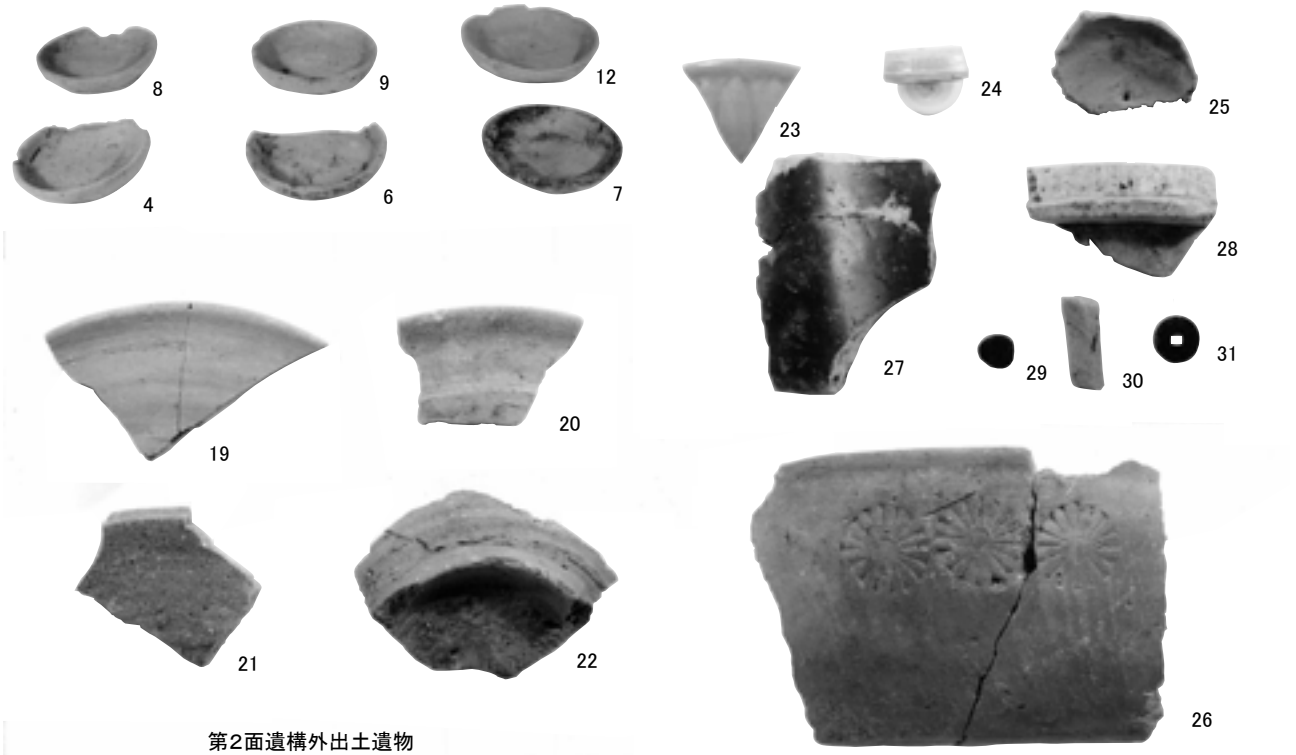
第2面遺構1－b出土遺物

第2面遺構2出土遺物

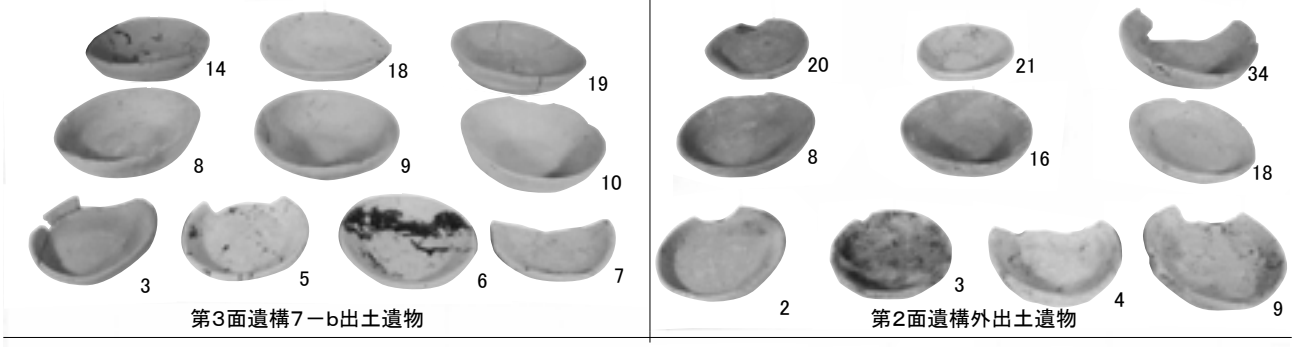
遺構3…24　遺構6…3～5・8・12　遺構7…13・18・23

第5面遺構5出土遺物

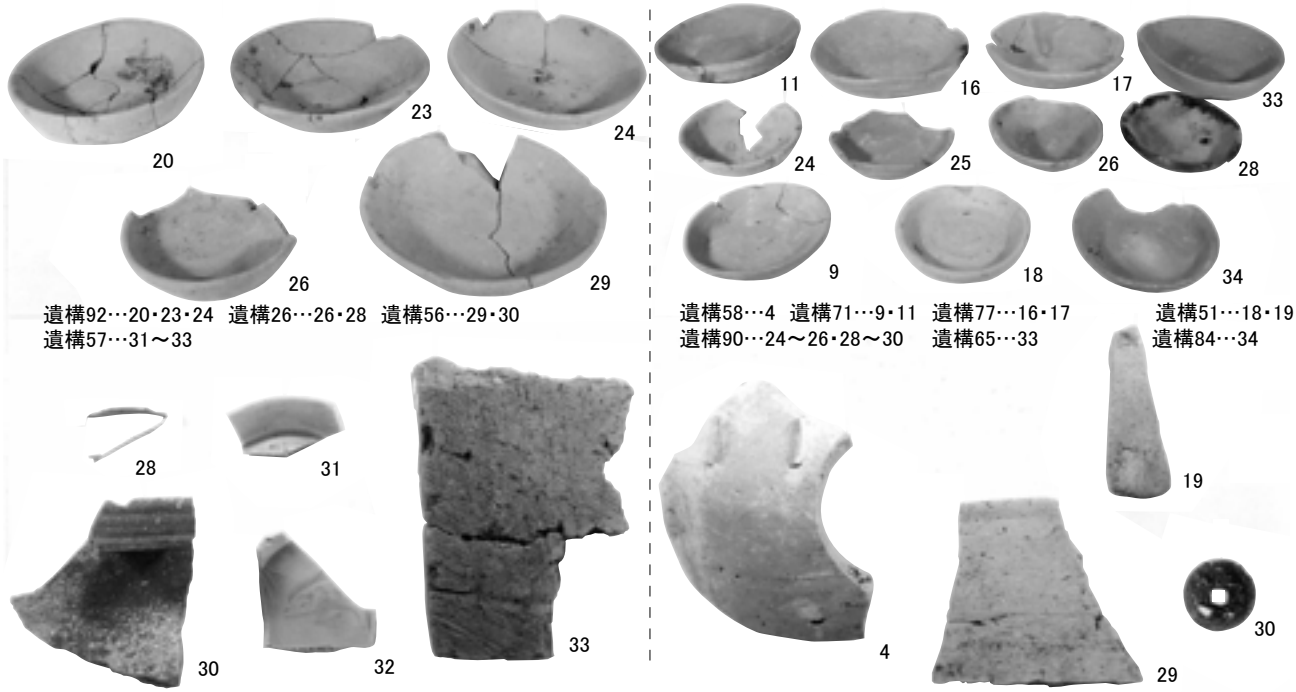
第2面遺構3・6・7出土遺物



第2面遺構外出土遺物



第3面遺構7ーb出土遺物　　第2面遺構外出土遺物

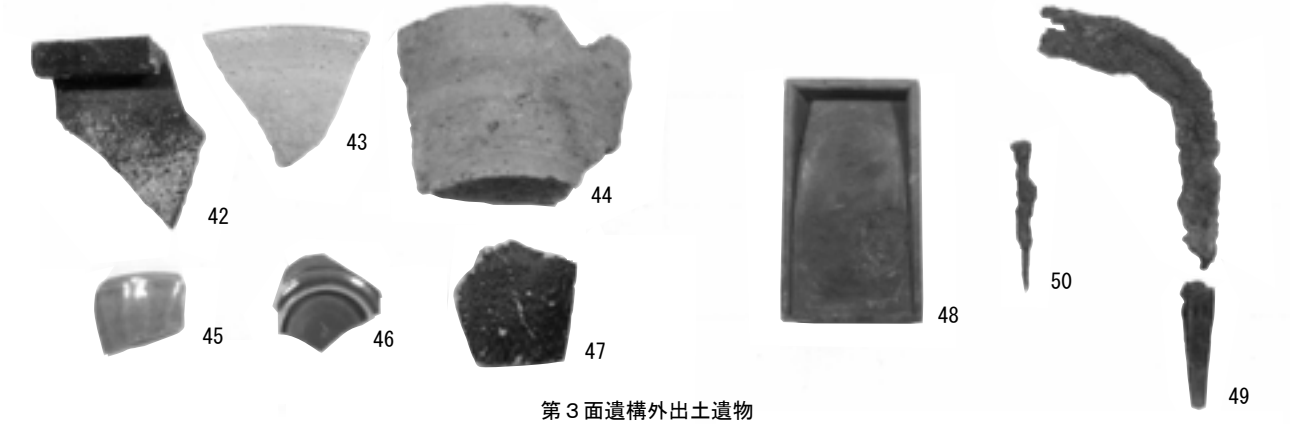


遺構92…20・23・24　遺構26…26・28　遺構56…29・30
遺構57…31～33

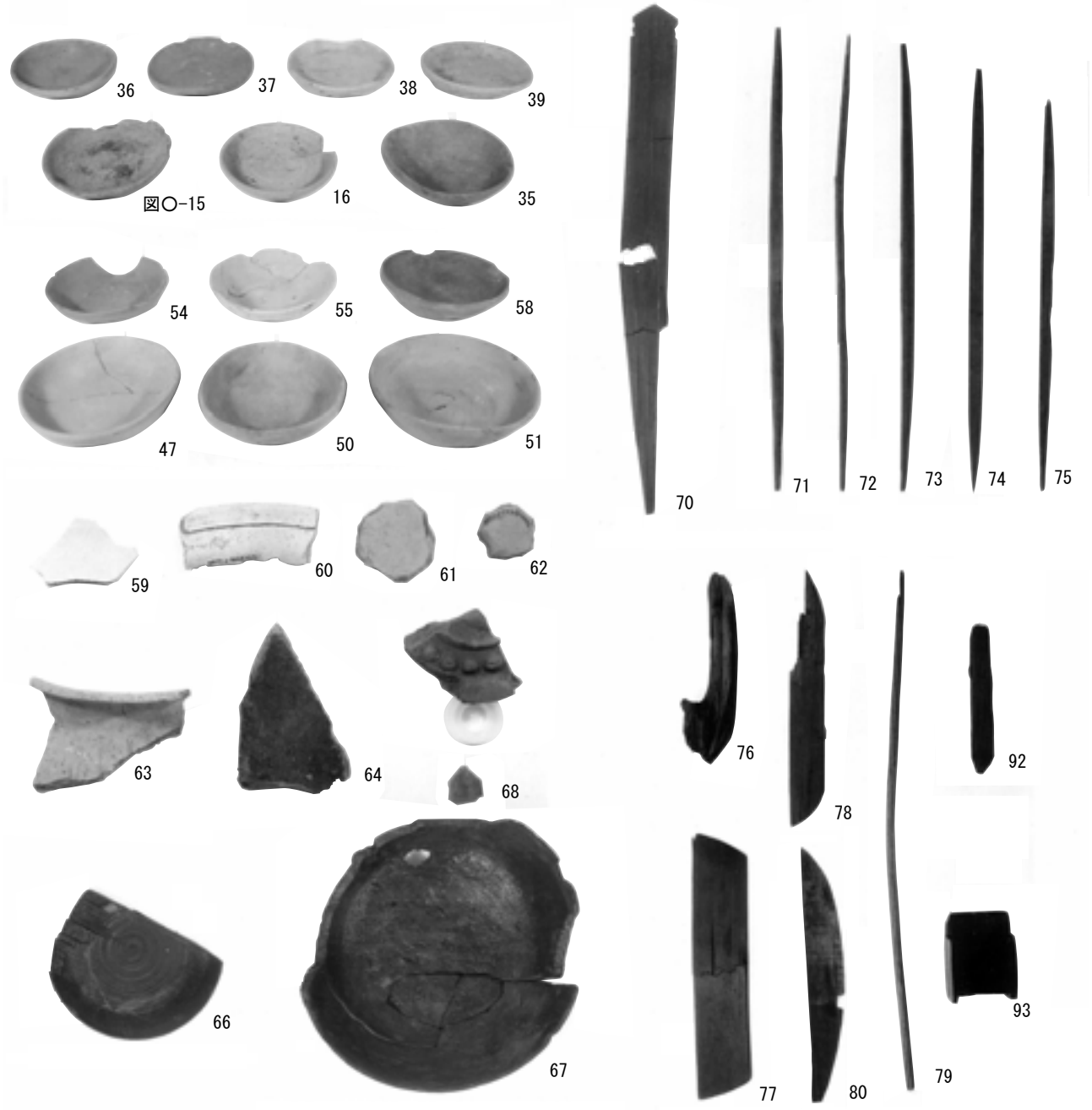
遺構58…4　遺構71…9・11　遺構77…16・17　遺構51…18・19
遺構90…24～26・28～30　遺構65…33　遺構84…34

第3面遺構出土遺物

図版7



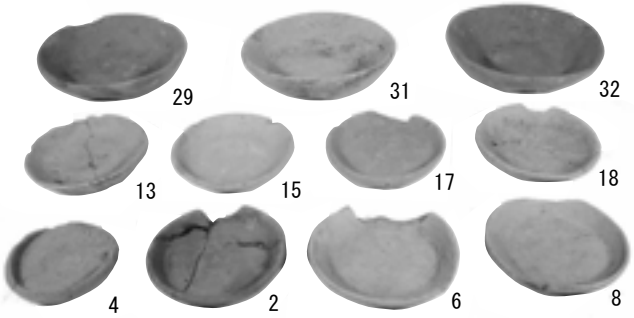
第３面遺構外出土遺物



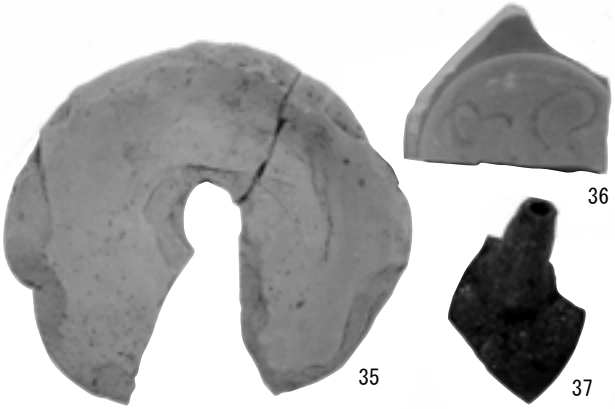
第４Ａ面遺構９１出土遺物

遺構91-96

遺構96-53



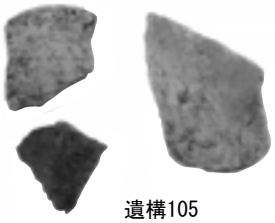
遺構９６



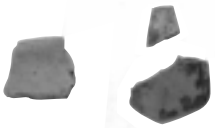
遺構９６

遺構96-38

遺構96-44



遺構105

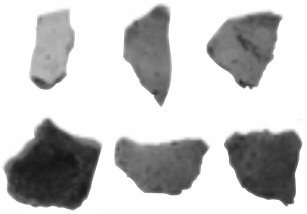


遺構106

遺構96-45・49

遺構96-41・40

遺構96-50・51・52



遺構128

遺構129

報 告 書 抄 録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成２２年度調査報告
巻次	２７　（第２分冊）
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者	福田　誠／降矢順子・齋木秀雄／熊谷　満
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒２４８－８６８６　鎌倉市御成町１８番１０号
発行年月日	西暦２０１１年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
おおくらばくふあと 大倉幕府跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下三丁目 ７０４番３外	14204	253	３５° 32′ 498″	１３９° 56′ 106″	20051025 ～ 20060127	56.00	個人専用 住　宅 （杭基礎構造）
ほうじょうときふさ・あきときていあと 北条時房・顕時邸跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 ２６９番１の一部	14204	278	３５° 32′ 269″	１３９° 55′ 403″	20060404 ～ 20060613	35.00	個人専用 住　宅 （杭基礎構造）
おおくらばくふあと 大倉幕府跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下三丁目 ６３７番４	14204	253	３５° 32′ 417″	１３９° 56′ 258″	20061121 ～ 20090119	68.00	個人専用 住　宅 （地盤の柱状改良）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
おおくらばくふあと 大倉幕府跡	官　衙	中　世	掘立柱建物跡、礎石建物跡、溝跡　等	舶載青磁、染付、緑釉陶器、瀬戸・美濃、常滑、瓦、ガラス製品、銭、かわらけ　等	
ほうじょうときふさ・あきときていあと 北条時房・顕時邸跡	都　市	中　世	溝、土壙、柱穴	かわらけ、貿易陶磁器、国産陶器、木製品、石製品　等	
おおくらばくふあと 大倉幕府跡	都　市	中　世	溝、土壙、柱穴	かわらけ、貿易陶磁器、国産陶器、木製品、石製品　等	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　２７
平成２２年度発掘調査報告
（ 第 ２ 分 冊 ）

発 行 日　平成２３年３月３１日

編集・発行　　鎌倉市教育委員会
印　　刷　　文一堂印刷株式会社